

はじめに

GO!GO!GO!

GO!GO!GO!

GO!は、向かっていくこと

GO!は、売れること 流通すること

GO!は、時を打つこと

GO!は、心が躍る、鼓動が高鳴ること

GO!は、あるがままにあること

NPO ハート・アート・おかやまは、芸術文化を取り入れた豊かな生活が日常的にできるよう、「アートリンク・プロジェクト」「笠岡諸島カルチャーリンク」「芸術と食の地産地賞プロジェクト」などを継続実施しています。いずれも長期コラボレーションや特別な場所でのワークショップを基本にし、多くの高齢者・障害のある人や子どもを含めた市民に表現活動を提供しています。人と人との出会い、繋がり、感性を交換することで新しい概念が生まれるというアートの視点から、市民の日常に新たな芸術文化の可能性を探っています。

地方都市の資源や地域性を考えたとき、抱える課題として少子高齢化や障害のある人への支援、中心部の人口空洞化や空き店舗の問題などが、「障害」としてあげられますが、しかし見方を変えると、障害とは人と人との間にあるものであり、「間」とは人と人との繋がり・関係性であるといえます。

アートリンクの視点から、食や日常を再発見し、岡山の魅力を探ろうと考えました。それぞれの存在が、それぞれの地域において「かけがえのない存在」であることを感じられるように、アーティストや全国のサポーターと連携し、それぞれの表現を生かし具現化し、ここにしかない商品として売ることによってアクセシビリティのある関係性を紡いでいきたいと期間限定のお店をつくりました。会期中は、多くのワークショップを開催し、新たな表現者らが参加しました。個々の表現がどのように社会と結びつき、個へ還元していくのかと、様々な分野の方を招

いての講座や、商品開発のためのテーブルディスカッションも行いました。そして、一方で県内外の施設へアンケートやグループインタビューを実施し、現状や課題を追求してきました。

その中で、障害のある人のもつ創造性を起点にした、職業領域の拡大を図ったり、新たな就労の機会を得たり、ひいては関わる人の工賃水準の引き上げを図ることも可能となっている現場に遭遇しました。

障害のある人の芸術文化活動のブランディングと流通のスキームの構築の調査・研究を行うと、それは、障害のある人の文化的な生活水準の向上が目的と言うよりも、閉塞した社会においては、障害のある人の表現こそが社会にとってかけがえのない道しるべとなりうるが見えてきました。

また、障害のある人のアート作品をデザインの現場で使用するための交渉の窓口、著作権や契約について的手法整備など、作家と使用者双方の繋がる仕組みをデザイナーや現場の人たちを考察してきました。私たちは、この研究を障害のある人や福祉施設の分野にとどまらず、CSR（企業の社会的責任）に取り組む企業、少子高齢化の進む中山間地域などを繋いでいくことで、社会全体が「創造的企業」として新しい創造都市モデルの提案、文化的な水準の引き上げが可能であるといえるまで継続実施していきたいと考えております。

最後になりましたが、本事業の実施にあたりまして、ご協力ご尽力いただきました関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

特定非営利活動法人 ハート・アート・おかやま
厚生労働省 2009年度障害者保健福祉推進事業
(障害者自立支援調査研究プロジェクト)

「コンパクト経済は日本を変える」

アサヒビール芸術文化財団事務局長

加藤種男



今日一番話したいのは、「コンパクト経済」という用語を発明して新しい経済の考え方を提案しようとしているという話です。

私は1年間に100泊位ホテル住まいをしながら全国あちこちを歩いています。どこに行っても皆が言っているのは「大変だ」ということです。そこで大きな企業を誘致したいとか、商店街に大型のデパートでも入れようとか、ないもの探しをしているんですね。岡山に来ると「高松では瀬戸内国際芸術祭が開かれるから商店街も明るいけれど、それに比べて岡山は暗いね」とか。ないもの探しはもうやめて、あるもの探しをしよう、つまり地元にある資源を徹底的に探して発掘していくことが大事なんじゃないかと思います。先ほど田野さんが、岡山には障害者の施設が約350もあると言われた。福祉施設などはこれまでネガティブに、生産性はないけれどやむなく作ってきたというふうに捉えられてきたわけですが、考えようによってはそんなにたくさんある施設は資源と捉えられるとも思います。岡山で田野さんたちが行ってきたハート・アート・おかやまの活動は、新しいソフト開発のような感じですね。特に、アートリンクは、障害のある人とアーティストを1対1のペアにしてアーティ

ストが「教える」とか「させる」とかではなくて、障害のある人や子どもたちの方から提案のようなアイデアが出て、それをプロのアーティストと実際に作っていくという、これまで誰も試みたことがないようなことを継続している。そういう意味ではこれまでの福祉に対しての新しいソフト開発だと思います。そういう風にあるものを探してないものをつくっていく。新しい考え方でこれまでなかったものを作っていく、あるもの探しのプロセスとして他の全国の事例を見ながら考えていきたいと思っています。

その中で最近着目しているのは「食」と「祭り」です。

食べ物は非常に重要ではないかと思います。衣食住という、人間が生きていく上で基本的な事柄にもっと着目したほうがいいと思います。食の資源を探せば、日本ほど豊かな資源を持っている国は世界中でも珍しいと思いますし、中でも瀬戸内は大変な資源があります。お祭りというのは、最近世の中で注目されているコミュニティーアートですね。参加者全員が楽しむアート活動。誰かが演じてあるいは作って、一般の人が見るというか受け取るという鑑賞型ではなく、みんな参加してみんなが見る、という意味では究極のコミュニティーアートといえる。そして何といても拠点がものすごく重要で、遺産を——それも役に立たないと思っているところを拠点とする。廃校や古民家、空き店舗や倉庫、場合によっては港なども資源として、拠点となるのではないかと思います。港湾施設なども私は関心を持っています。

そしてそういう資源の発掘とともに、人と人を繋ぐということがこれからは重要な点で、ジャンルをこえたNPO間のようなネットワークを考えていく必要があるのではないかと思います。

これまでは、シングルイシューという一つの課題解決をやってきたわけです。福祉なら福祉、障害のある人の福祉だけをものすごく考えている。それももちろん貴重なことですが、それだけを考えるとあんまりいい解決策が見つからないというか堂々巡りになる。

今、堂々巡りに陥っているのが教育のジャンルで、教育

のことを教育の人だけで考えていても良い解決法はなかなか見つからない。他のジャンルの人とネットワークを組む中で新しい解決法が生まれるのではないかと思います。

私は長く文化の領域で仕事をしているので、その観点から福祉でやっている文化活動を見る機会があるのですが、なぜこんなことやっているのだろう、もったいないなと思うことが多かったんです。そういうのをお互いに議論していくと、ここのアートリンクのような新しい発想、活動になってくると思います。

コンパクト経済の話をしします。新しい経済観を我々は持った方がいいと思います。近年、「未曾有の」と言われるほどの経済危機、社会的な構造変化のときですが、このような社会危機の時こそ新しい考え方を提言しなくてはならない。

私も属している企業メセナ協議会では、昨年3月、社会創造のための緊急提言として、「ニュー・コンパクト」(COMPACT=Community Policy for Action)という考え方を発表しました。これは、相当マスコミでも取り上げていただき、それなりに珍しく反響のあった考え方です。この用語によって、ニュー・コンパクトの時代が来たというふうにしようと思っています。その骨子は「文化振興による地域コミュニティの再生策」ということです。企業メセナ協議会というのは、文化支援に熱心な企業が集まって作っているネットワーク組織です。資生堂の福原義春さんが会長で、NHKの会長をしている福地茂雄(アサヒビール相談役)が理事長、私は研究部会の座長です。その研究部会が中心となってこの考え方をまとめました。文化振興によって地域コミュニティを再生していこうということが、社会再生に一番近道ではないかと思って提案しました。

その中では、文化への集中投資が緊急課題だと言っています。経済振興策が今の政権に見られないのは問題だとは思いますが、従来の経済振興策だけやっても経済は良くならないだろうというのが、我々の考え方です。

社会の構造変化のときには経済政策そのものも変更していく必要があるのではないか。一つだけ言いますと、道路をやめるとかコンクリートをやめるとか、箱ものをやめるとか言っていて、私は基本的には間違っているとは思いますが、たとえば田んぼの中に立派な道路を作るなんていらないに決まっているけれど、無駄とは言いつつ、一定の留保は付ける必要はあると思うのです。というのは、経済の振興策という意味で見たら、とりあえず道路を作れば土建業種は潤うわけで、その潤ったお金を繁華街かどこかに行って使うでしょう？そうすると、我がビール会社にとっては決して悪いことではないので(笑)、そういう経済的波及効果というのはまったくゼロとは言えないのです。従ってなんの役に立たないことに投資をするということも、それだけで経済効果はあるということです。但しこの経済効果は1回限りのもので、道路は、いらないものを作っているわけですから、その後ほとんど価値がないわけです。今年度の公共事業としては多少経済効果があるかもしれないが、来年度以降何も生まないです。

10年も20年も繰り返し経済波及効果があるような投資というのをやるのが、本来の経済政策であり、そういう公共事業をこれからやっていくべきではないかというのが我々の提案です。例えば、商店街の空き店舗を改造して、そこに創造産業なり文化の拠点をつくってあげれば、それは毎年活用されていくわけですから、田んぼの中のコンクリートの道路とは訳が違う。そういうふう公共事業のあり方も転換しなきゃならないんです。

新しい地域社会像みたいなものを提案していこうと思っています。私はコミュニティを何としても再生しなくてはならないと思っているんですが、そのプロセスでコンパクト社会とコンパクト経済というものを提唱しました。我々は二つ大きな危機感を持っています。一つは地域社会の疲弊です。10年前と比べても本当にひどくなっていると思います。そういう意味で地域社会をなんとかしなくてはならない。もう一つの危機感は、これは必ずしも十分理解されていないかもしれませんが東アジアに

おける日本の孤立です。中国・韓国・シンガポール・台湾など東アジアの国々は、地域振興・文化振興をものすごく一生懸命にやっています。国家戦略として行っているというのが一方にあって、逆に日本は事業仕分けとか、指定管理者制度とかでコスト削減だけ考えていて、このままていくと東アジアにおいて日本は孤立して、非常に危険だと思っています。鳩山総理が東アジアの共同体という構想を出してきて、それに対して韓国・中国が批判をしなかったのは非常によかったと思っています。今までだったら大東亜共栄圏の再現かと必ず批判されるはずなのに、批判されなかったのはこれまでの政権よりは民主党政権の方がアジアの歴史的認識が悪くはないよという表れでしょう。そういう意味で本当に東アジアの共同体構想というのは将来的には必要だと思いますが、それを実現するためには日本はもっと考えた方がいい。このような危機感の中で、コンパクト経済というのは、どこの町、どこの地域にもあったことを復活しようということなんです。4つくらいの特色を考えています。

一つは製造販売を一体化していくという考え方です。これで一番大きく成功しているのはユニクロです。あそこまで規模の大きいものはコンパクト経済とはいえないかもしれないけれど、他のスーパーとかコンビニとかデパートでは、自分たちで作ったものではないものを販売している訳です。誰かが作ったものを販売する。これは経済にとって大規模化していくためには必要なプロセスだったかもしれないです。さすがに今となっては行き詰まりというか、大量生産大量消費型の経済を追いかけ続けている限りは地方の商店街の疲弊は免れない。大量生産大量消費は資本主義がこれだけ発達している社会においては、なくならないけれども、その間を縫うというか、それと並んで、もう一つの新しい経済の考え方が必要なのではないかと思っています。近所のパン屋さんとか蕎麦屋さんとか、普通はみんな自分のところで作ったものを売っていたわけですね。原材料はどこかで買ってくるかもしれないけれども、でも全部自分のところで加工して販売していた。これは製造販売の一体型です。これを100%

できるか、ある程度基準を置くか、これはいろいろな考え方があるけれども、原則として自分のところで作ったものを自分のところで販売する。それで1家族とアルバイト1人くらいが食っていけてどうして悪いかということですね。これを大規模化してチェーン店化していかなければならないという強迫観念に今まで我々は捉われすぎていたけれど、それをもうやめた方がいいということです。1店舗だけで1家族とプラスαが食っていける状況というのは昔はいくらでもあったし、今だって実は丁寧を探せばそういうのは商店街の中にはいっぱいあります。そういう人たちの役割をもっともっと評価をしていく必要があると思います。これは、実は横浜の街を見ていて思いついたのです。横浜の元町商店街は製販一体化を進めている商店街です。製販一体と、規模を拡大しないという思想があるんです。空き店舗が出来ると、普通はいくつかの3軒くらいをまとめて1軒にしたり、3階建てを5階建てにしたりという発想が普通ですが、本町商店街は1軒の空き店舗のまま次のテナントを探しかかる。製販一体を行う人というのを条件に探してくる。どうしても店舗を拡大したい人は本町商店街から出ていく。ここでは小規模経営を維持しているんです。

もう一つは地産地消を中心に置くことです。全部を地産地消にすることは難しいですけれども、なるべく中心に置く。さっき「買ってくれる人の顔が見える」という話がありましたけれども、地産地消は生産者の顔が見えるという意味で貴重なことです。

岡山の福武さんが面白いことを言っています。「美味しい物は島で食え」と。今までは美味しい物を東京の築地に送って漁業関係者は現金収入を得てきたけれど、もらえる金なんて大した違いはないし、東京者にそんな味の違いなんて分かるわけがないんだから、下関のフグだとか、明石のタイだとか言えば、それだけで喜ぶんだから、本町においしいフグとかタイとかは獲れた所で食べてしまおうというわけです。それが一番幸せですから。これが地産地消ということです。余り物というか2級3級品を送ったとしても手取りではあまり変わらないんですよ。

生産者に入ってくる現金は。それだったらいいものは地元で買ってもらって地元で加工する。その代わりに、加工は今のままでいいかどうかを工夫しなきゃならない。地元でいろいろ考えていく必要があると思うんです。

それからFace to Faceによる顧客管理、つまり顔の見える関係——、小規模にして地産地消をやれば、お客さんの8割くらいは顔が見えている。これが貴重です。

こういう経済を含んだ地域社会の考え方としてコンパクト社会というものを考えたいと思います。なんのことはない、昔はみんなこうだったということです。歩いていける範囲で社会サービスが充足しているようなことにならないかなと思っています。ここまで車社会が発達すると、過疎地に行ったら車がなきゃ何ともならない。と言いながら、高齢化が進むと車の運転なんかできないという人たちが増えてくる。そういう矛盾は何とかしなくてはいけない。

岡山の田野さんが、瀬戸内で目を付けた笠岡諸島の人たちの生き方、戦略は素晴らしいですね。子育て世代を過疎の島に誘致しています。そんなことが出来るのかと思っていたら、本当にできている。ものは考えようだなと思った。そういうコンパクト社会を実現したいなと。NPO 自治みたいなのをしていく必要があるだろうし、アートによるコミュニティの再生を目指していくことがこれから重要ではないかと思っています。ここからは、ではなぜそれが必要なのかということと、その事例を少し紹介したいと思います。

さっき話した中に、横浜の元町商店街の話がありましたけれども、これを私は商店街自治のモデルとして強く考えているんです。元町商店街はこれまで3回大きな改革をしておられます。その第2期だったか、5年くらいかけて自分たちの街を良くしていこうと、例えば、真ん中を走っている車を締め出すのか、歩行者と両立させるのかなど非常に長く議論しておられます。そのなかで私が一番驚いたのは、5年間の商店街の寄り合いというか会議の数です。これが600回にも及ぶということです。計算すると3日に1回。皆が集まれる時間帯に、朝だっ

たり夜だったり。皆が集まれる時間にいつでも集まって議論していたとおっしゃっていました。3日に1回集まって「どうする？」と、いいアイデアを出し合っかんかんがくくやっていたことが自治のモデルだと思うんです。セネガルの「村からの便り」という映画があるんですけど、大きな木があってそこに村の人が集まってきました、日がな一日物語をしている。隣のおばあちゃんの話とか作物のことや、自分の家のことなんかを。次の日もまた同じような話をしているんです。別にそこでも決めたりもしない。日本でも、昔はなんだかこうだったなあと思うんですね。村の寄り合いというのは特に大きな決めごともなく、時間に来てすぐに話し合っただけでもなく、世間話をしてた。高度経済成長期前までは村の人は時間を守らないというのは当たり前でした。日本人がこんなに時間を守るようになったのは高度成長期以降だと思います。そうしないと社会が成り立たなくなってきたから。それまではのんびりしていいですよ。で、寄り合いは、2時間くらいも時間に遅れてくる人がいて、話し合いも特になくて「ま、今日はこれくらいで」と言ってまたあくる日にも集まる。子どものころのことで、私もその片鱗しか知らないんですが、何も決まらない。若者はイライラするんですが、年寄りも平気なんです。みんな異論があるわけです。自分が気になることや、心配事などがあつたときに、直接そのことだけを言うのではなくて、直に顔を合わせることで、時間をかけていくうちに、どうも気になることをふと漏らす。そこで村の誰かが意見を出す。最終的に時間をかけて村の人の全員の合意を目指す仕組みになっているんです。日本は明治維新以降、それまで相当大幅にあった村自治・町自治というシステムが破壊されるんです。議論による合意形成。でも議論するわけでもなく、なんとなく集まって皆がどう従っているかを少しずつ皆で考えていて、説得もするが反対の意見も感じ取り「落とし所をさぐる」というか、ものすごい時間をかけるという民主主義の形態があつた。これについては、柳田国男も証言しているし宮本常一も言っている。そういう自治

制度。だから多数決制度はまったく馴染まない。多数決で物事を決めるというのは最悪のケースで、必ず不満な人が残る。少数派はいつも不満な訳です。戦後民主主義は最悪というか多数決、じっくり議論して合意形成を図っていくということが本当は重要なんだが、この忙しい社会でこんなことをやっている場合かということになっている。元町商店街にはあったのです。当初は商店街の理事長さんは、ここは車を締め出して歩行者専用にしよという意見だったのですが、一部の商店主の「そうはいつでも、自分の顧客の中には遠くから来る人もいるから、車が入れなくなると死活問題になる」ということを聞き、突然思想を変えて、「車歩一体で行こう」ということになったという。そういうやり方をとっている。そんな例で、のんびりとした物事の決め方で、地域の資源を開発しながら世の中を変えようとしている人たちの事例を紹介しようと思います。

① 近江八幡

ここは非常に面白くて、多彩なことをやっておられます。一つは酒造りをされた。琵琶湖に続く小さな西の湖という湖に、権座（ごんざ）という無人島があります。中に水田があって、わざわざ船で農機具を持って行って耕して、収穫物も船に乗せて帰るといふ非効率的な島です。島で米がとれたので、村の人が酒造りをしたいということになり、酒米を植えました。一昨年の酒米で第一号の酒が出来て、試飲会をしたんです。この一帯は水郷地帯で国指定の重要文化的景観にもなっている。葦も取れて、このエリアには巨大松明のほんがらという祭りがありまして、映画を撮ることもあって、80歳を過ぎたお年寄りたちが祭りを再現しました。祭りの再現は一回だけで終わるかと思っていたら、実現できておもしろくなって今のところ3年ぐらい継続しています。復活してしまいました。もともとは地元の青年会の祭りでした。若いころ青年会に入っていた人たちが80を過ぎてかろうじて覚えていて、復活させた祭りに今の若者が参加して祭りの再興になっている。障害のあるなしにかかわらずいろいろな人の作品を展示する古民家改造のギャラリーNOMAも

あり、尾賀商店という巨大な古民家があり、ここにクリエイターやアーティストが5組入って運営している。カフェやギャラリーなど混在していて、歴史的建造物の活用がすごいことになっています。ヴォーリーズの建築のメッカでもありまして、ヴォーリーズ建築が相当数残っています。一番大きいのは高等学校で、メンソレータムの近江兄弟社もあります。水路もある。運河に面した古民家のカフェなんてたまらない！絶品です。私は横浜で、プロデューサーの乱立を仕掛けています。横浜は全体像が見えないとよく言われるのですが、私は、全体像が見えたらおしまいだと思うのです。何が何だかわからない状態になっていくのが重要だと思っていて、プロデューサーを乱立させて、誰がやっているのだろう、そういう誰がやっているのかわからないけど、あの人もこの人も関わっているという状態にしています。

② 淡路島

ここにはイタリア料理のリゾレッタという店があります。これは本当に淡路産のもので地産地消でやっている。野菜も魚も獲れる。京都の料亭なんかで使うハモの相当数はここから行っていますが、島の中の製品の開発もしている。菜種油の推奨をしている。オリーブの代わりに地元産を使っている。塩も昔の製塩業の復活で藻塩をつくらしている。

淡路についていえば、私の妄想ですが、岡山も含め瀬戸内を世界最大の観光地にしようと考えています。アートサイト・ネットワークというものも作ろうとしています。真ん中に福武さんの大きな財団もありますが、東は大阪から、西は別府まで全部を瀬戸内と考える。今は県や市町や島で区切られていますが、これをまとめて考える。私はこれほど見事な多島海は世界一だと思っています。外国人をターゲットにする。開空に外国人に来てもらって、上陸させずにそのまま船で淡路の洲本に行ってもらおう。船に乗るのが旅の重要な点ですから、ここからクルージングの旅が始まる。一泊目は淡路で、地産地消で寿司や美味しいものを食べさせ、夜はエンターテイメント

で人形浄瑠璃を見てもらう。日本人は東京の国立劇場では流行っていて見られていますが、淡路島のはあまり知られていない。日本人すら知らないが、外国人に中国韓国人にみせることで、日本人も知らない文化を教えていく。新作人形浄瑠璃も作りたいと思っている。その次の日から、瀬戸内を回ってもらう。1週間コースとか、2週間コースとか、10個くらいモデルコースもつくっていくと考えている。という夢があるんです。

③ 八戸

八戸には三社大祭という祭りがあります。横浜トリエンナーレで大きなクモを呼んできて大騒ぎしましたが、それに勝るとも劣らない、ものすごい巨大な山車ですね。煙を吐いたり伸びたりするんです。これを手作りです。これを手作りです。アナログで手間暇かけて一個一個作っています。1年使ったら終わりなんです。発泡スチロールに着色してつくっている。アートの極みですよ。これがすごいのが、出演者の数が5000人ということです。山車やパレードの数を合算すると、30万人足らずの街で5千人が出ている。見物人はもっと多くて70万人くらいいる。

祭りって何がいいか。究極のコミュニティーアートですね。本来祭りには見物人がいないんですよ。今の商業的な祭りには、見物人はいます。全国で有名な祭りは見物人だけです。でももともと祭りには見物人はいない。なぜかというと、町中全部、全員出演者。見物人を想定しないのが祭り。町ぐるみ村ぐるみで全員楽しむというのが重要なことで、但し想定されたただ一人の見物人がいる。神様ですね。神様に、今年も豊作ありがとうございます、来年も宜しくお祈りしますとお祈りするのが祭りなんです。お礼とお祈りをする。これが祭りの意味で、全員が参加者であり作り手です。アートにとってこのことが意味があることなんです。これが逆転したのが、近代の芸術文化です。近代の芸術文化は、天才的なアーティストが一人つくって、大勢の人が見ます。美術館なりホールなりに行くと、立派な人の活動を我々が作品を

押し頂いて、つまりアーティストが神様の位置に行ってその他大勢が見物人になっている。祭りの構造と逆でしょう。つまり祭り型アートをもう一回復活させなくてはいけないと思っている。必ずしも祭りを復活させればいいのかと言っている訳ではないんです。祭りは途絶えているところも圧倒的に多いから、いまさら復活させようとしてもうまくいかない。そのプロセスとして、まずは若い人たちに関心を持ってもらう表現活動を導入する必要がある。地域の年寄りが元気になるためには若い人が来る必要がある。若い人が来るようにするためには、そういう人たちに関心を持ってもらえる活動をする必要がある。新潟の越後妻有アートトリエンナーレが成功しているのは現代のものを持ってきたということです。現代の新しい表現を入れることで若い人たちが関心を持ってくれる。今度瀬戸内でしょうとしていることも同じです。そして来た人たちが地域に関心を持ってくれるということです。雪に閉ざされたところでどうやって生きてきたのだろうとか。ちょっとお年寄りに囲炉裏で話を聞くと、ふと古い芸能の話や聞いて、祭りの話や古いことに若い人が関心を持ってきて価値がようやく理解されるようになる。そんなことをもっとやっていかなくては、と思っています。

④ 豊岡

兵庫県豊岡の3つの事例の連携の話です。城崎は旅館が107もある温泉です。それともう一つは、出石の歴史的町並み。ここに価値を見出した人たちがいた。また、4軒くらいしかなかった皿そばをブランド化して50店にも増やしている。全部繁盛している。恐るべきことですね。

芝居小屋もある。昔は城崎で温泉に入り、帰りに出石で蕎麦を食べて帰るコースだったのですが、時間が持たないというか近い。で、その間にできたのが、コウノトリの郷です。これが出来たおかげで、城崎、コウノトリ、出石というコースが出来た。豊岡は広域合併してうまくいっている。コウノトリを地域創造のシンボルにしよう

としている。オープンケージで放し飼いにしています。コウノトリの野生化が生産構造を変化させているんです。コウノトリは大喰らいで、好物のドジョウをとにかく生かしておく必要がある。そうなる農薬が最悪ですから、有機農法に変えた。そしてそこで獲れるコメをコウノトリ米としてブランド化して販売したら、1, 5倍で売れると。食文化を変えていくし、環境も変えた。円山川とって反乱をしていた川の治水を兼ねて水域を広くしているんですよ。土砂を取り除いて、コウノトリのために改修すると人間のためにもなるんですね。コウノトリのために地域全体が変わりました。

⑤ 千島土地

大阪にあります。芝川さんという地主さんが名村造船所跡をさながらアートセンター化していこうとしています。文化予算を削減していた橋本大阪知事も、名村造船所を見に来て時間を過ごしたおかげで考え方を変えて、水都大阪ということで考え方を変えたんですよ。ここが瀬戸内プロジェクトの一番東側と思っています。

⑥ 伊丹

古い酒蔵を活用しています。ここが良いのは伊丹市の文化振興財団には若いビジョンを持っているスタッフがいて、その人が地元の商業界の会長とふたりでまちづくりをしている点です。つまり行政側の外郭団体と商店街の結びつきというケースがすごいです。

こんなことを中心に、地域振興を文化で何とかやれるなど考えたのは、冒頭に紹介していただいたアサヒアートフェスティバルです。これは全国のアートNPOの集まりみたいなものですが、それぞれは自立しているんですよ。中身については私たちは関与しない。それをネットワーク化することによって、地域拠点を開発して、なんとかアートでやっていこうと皆さんに進めています。その進め方については全部みなさんが自立しています。

この中で一番成功しているのは、別府だと思います。Beppu Art projectは本当に空き店舗をリノベーションして、巧妙にいろんな省庁を使って金を集めてやっています。そういう中で自分が住んでいる地元の東京に隅田川がありますが、2089年をゴールとしたアートプロジェクトをしています。去年初めてwao(わう)というアーティストグループに見本を頼んだ。80年前にはこの川で泳げたので、泳げる川を復活させるようになるまでに、これをプールと見立てて、飛び込み台をつくったんですね。後は、ゴルフやりたいという人がいて、船の上にグリーンやらバンカーを作ってゴルフをやった。昔本当にあった風呂船も再興。いろんなことをしながら、80年で元の隅田川にしようという壮大な計画です。でももう誰も生きてないでしょう。

こんなことを考えるようになったのは、今から思うと京都に美術館・大山崎山荘をつくった。また、横浜で眠っている資源・歴史的建造物を活用する創造都市の活動に加わったために、このようなことを考えだしたのだと思います。

最後に、「文化芸術こそ社会再生の切り札だ」という話をします。

文化観をそろそろ転換するべき時が来ました。祭りの例でも言いましたが、ハイカルチャー絶対視から早く脱却したほうがいいですね。オーケストラ、クラシック音楽、美術館はもういいんじゃないかと思います。

アートを高尚なものだと思わないで、教育や環境やまちづくりや福祉、どんなことにでも関わらせることが出来るのだから関わらせていこうよ、と考えています。よく「その資金は文化のためかまちづくりのためか」と言われることがありますが、二者択一ではなくて、両方ないといけないので、ありとあらゆる課題解決に文化の話は重要なんですよ。そういうことを皆さんに理解していただくためにアートNPOの全国ネットワーク組織を作って、いろんな地域で行われていることのほか、我々以外にも越後妻有や福武さんらのプロジェクトがあって、そういうのを横目で見ながら全てのアートサイトをネッ

トワークすることが出来ないかなと思っています。住んでいる人にとって住みやすい街を目指して、すべての人が創造的になる。市民はみんなアーティストだった。と思えると何でもできるということです。

その関連で急に思い出したんだけど、さっき名刺交換をしていたら、牛乳の会社の人がいて、ふと思い出したんです。昔、淡路に行ったときに誘われて弾みでカラオケ屋に行ったことがあって、そこで私が提案したんです。

「得意の歌ではなくて、皆が知らない歌を歌おう」ということにした。皆が知らない歌で、しかも自分と関係した歌を歌う。そこで、牛乳屋の人がいたので牛乳の歌を歌おうと。「牛乳の歌」というのが本当にインデックスにあった。

知らない歌だけど、みんなで歌うことは極めて創造的でしょ。誰も知らないんだけど、無理やり曲に合わせて皆知らない歌を歌った。私は加藤種男ですが、「種」の歌もあるんです。これも歌った。有名じゃない歌は実はつまらないんですよね。でも2時間も延々歌った。つまり、知っている歌を真似して歌っても創造性なんてないんです。我々は発想を常に変えなくちゃいけない。アートの一番の根本は何かというと、知らないものを作っていくということです。ゴールが分からない。ルールが分からない。モデルもない。そういうものを作っていくこと。

それが創造的ということです。とにかく1個1個手間暇かけて、これだけ効率化やら生産性やらを言い続けられている状態の中で、たった1個の店舗で作ったものを一つ一つお客様に提供するということですよ。これが非常に貴重だということ。障害のある人たちの仕事というのもそういうことです。まさに1個1個手作りで、ものすごく手間暇かけて、もっと機械化すれば簡単にできることもあえてそうしないで1個1個作っていくという。これがアートの非常に貴重なところです。そこから創造性が生まれてくるわけです。ここの活動もそうですね。面倒臭いことを考えないで、簡単にできる方法があるのに、その方法をとらない。そんなことをしても人生の生きている実感なんて湧いてこない。本当に生きていく実感が

湧くのは非効率非生産性なことからです。その意味でもコンパクト経済を再興するというお話でした。ありがとうございました。

企業メセナ協議会2007年発表「日本の芸術文化振興について、10の提言」

社会創造のための緊急提言。ここで「ニュー・コンパクト」(COMPACT=Community Policy for Action)※を提言した。

ニュー・コンパクトは、以下の5つの原則とアクション・プランからなる。

<5つの原則⇒5つのアクション・プラン>

- 1) 循環型社会の再生と創造⇒地域資源の活用とコミュニティ経済の確立
- 2) 地域文化の再生と創造⇒文化への集中投資
- 3) 市民自治による社会的な課題解決⇒地域の市民セクターの強化
- 4) セクター間ネットワークの強化⇒領域横断的な地域文化振興策の強化
- 5) 地域間ネットワークの形成⇒クリエイティブ・コミュニティ・ネットワークの構築

詳しくは、協議会ホームページ

<http://www.mecenat.or.jp/news/kmknews/advocacy.htm>

1

「GO!GO!GO!店舗と商品の紹介」

GO!GO!GO!では、以下の4種類の分野から商品を集め、約150点の商品を販売しました。

- ① GO!GO!GO!オリジナル開発グッズ
- ② 全国応援グッズ
- ③ 県内作業所の協力商品
- ④ 個人持ち込みグッズ

《①GO!GO!GO!オリジナル開発グッズ》

◆CD「チエオト」



施設での活動中、一人ヘッドフォンをしてキーボードを弾いていた。その表情が生き生きとしていたので、コードを抜いてみると、なんと素敵な音楽が！「ユーチューブにアップすると面白いかも」「アーティストとリミックスしたら」しかし、施設の中ではほかの人の作業の妨げになっているとのこと。100枚のCDにして、1枚1枚ちえさんにジャケットを手描きしてもらった。

◆エノホン



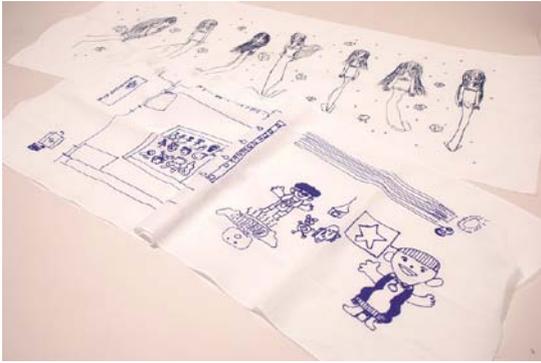
鏡があれば、いつだってそこはステージ。そんなヒーロー長谷川海。彼はパソコンで絵を描き続けている。アートリンク・プロジェクトで彼のペアのアーティストになった清水直人が、それを動画にしたことがきっかけで、いつしか連続した絵が描けるようになり、そこから7コマ漫画エノホンが生まれた。絵だけのエノホンは第三者の表現が加わることでさらに拡がり生まれる。これまでの活動を紹介しつつワークショップが行われた。

◆交換日記



今では懐かしくなった交換日記も、彼女の好きな事のひとつです。2007年のアートリンクプロジェクトでペアを組んだアーティストの湯月洋志さんを含め現在も多くの人と交換日記を進行中です。そんな彼女の日常をそのまま交換日記専用ノートとして商品化しました。メール中心の時代だからこそ交換日記を始めてみては？

◆手ぬぐい



お風呂が大好きな片山雄司さんと、海の伝説「マーメイド」が大好きな竹本ひかりさんの絵をもとに作った手ぬぐい。これを片手に銭湯に行き湯上りライブを実行した。

◆おたより



ダジャレ日記を毎日書いている友実祐介さんの日記から1枚！手紙の応酬が大好きな山もの文香さんの「おげんきですか。」という文章を1枚！不思議な生き物を書いている守都純平さんの絵を1枚！便箋はできた。そしてなんと、オノエイジさんの蠅の絵を封筒に印刷して、レターセットは完成した。手紙をもらった人の反応が楽しみだ。ワークショップでは、実際にこのレターセットを使い手紙を出した。

◆靴下



漫画家を夢見て、漫画を読む、同人紙を買うなどと日夜努力している伊丹宏太郎さんのオリジナルキャラクター「ツギウサ」。ハイソックスに「ツギウサ」を刺繍した。「本物の女子高生が履いてくれたらなあ」という彼の願いは・・・遂に叶った！

◆時計



西崎亮さんは、今回の「GO!GO!GO!」を書いた本人。家では広告の裏に、時計も描いている。カラフルなマジックで時間を描くのだが、その文字盤の数字の並びは絶妙にずれている。秒針が回り、時刻が過ぎていくのを見ていると、そんな時間の過ごし方もあったことを気づかされる。

◆ケーキシール



イチゴのショートケーキ、モンブラン、抹茶ケーキ……。藤原恵未さんが考案したケーキは、シールになったが、それを調理師の資格を持つ片山さんと作って食べるというワークショップが実現した。

◆絵本「人魚ひめがうみからやってきます」



空想の世界を語る竹本ひかりさんと画家中屋敷智生さんの共同制作。アートリンク・プロジェクト 2009 から生まれた世界を本当に絵本にした。

◆積み木



3,5 cmのキューブが詰まった積み木の袋。同じ形だけ 30 個入っている。こだわりのある子どもが手に取ると、どうやって遊ぶのだろう。同じ形の材木を切り出し、磨き、袋を作り・・・と、会のメンバーが手作りでつくった。
協力：倉敷木材株式会社

◆モモピク



桃は中国が原産地です。昔より「仙果」と呼ばれ、不老不死の伝説が残されています。岡山では江戸末期から栽培されており、武士から果物農家に転じた人々も多く関わり、緻密な作業を伴う品種開発が繰り返し行われ、現在は 30 種類以上もの桃が出来てきました。 数ある桃の品種の中でも「清水白桃」は、明治 7 年に岡山で発見された偶発品種です。その果肉は、大きさは 250~300 g の均整のとれた大果で、淡い色合い多汁で芳香があり甘味も多く、味は極上と大玉なものは贈答品として喜ばれています。 岡山県内では、岡山市の一宮・津高や玉島北・総社・赤磐市山陽の地区が中心です。5 月の日差しが降りそそぐ中、山陽で摘果された桃を塩漬けしたのち、加工しました。味はプレーンな「モモピク」と、カレー味「モモツケ」があります。

《②全国応援グッズ》

◆鳥取砂丘砂コーヒー



砂丘の砂にコーヒー豆をサンドして 250 度の高温で焙煎しました。この商品は、鳥取県の宝である「鳥取砂丘のすばらしさを一人でも多くの方に伝えたい。」との思いで作った鳥取砂丘こだわり商品です。ほどよい苦みとまろやかな味わいです。

◎鳥取県福部の人が「ここには砂しかない」と、あるものを生かして考えた商品です。売り上げは鳥取自閉症協会にも還元されています。

◆あやぼうろ



土を耕し、種を蒔き、そばの実を収穫。それを粉にして…。こねて…。まるめて…。焼いて…。出来たそばぼう

ろが『あやぼうろ』です。自家焙煎のそばの収穫量が限られている為、

数量限定の生産販売となりますが、今後はそばの収穫量を増やし、もっと多くの人に召し上がって頂きたい自信作です。

◎植物をその土地で育てて商品にするという、長い過程を楽しみながら作っている。そして、そこにアーティストがデザインしたパッケージが人目を引きま

《③県内作業所の協力商品》

◆ジョニーストラップ



手先の巧緻性を高めるための訓練で出来てきた、フェルトの球。日に日に貯まるこれらの球をつなげてみると「なんか芋虫に見える」と。そこから生まれたのが、ジョニーストラップ。頭の上には、葉っぱや帽子、ヒマワリが載っている。とても愛らしい表情は一つ一つ異なっているので、選ぶのもとても楽しい。

Enquete

アンケート

厚生労働省・障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）

障害者の創造的活動による創造的工賃支援・社会参画にかかわるアンケート調査

はじめに

近年、施設や作業所ごとにユニークな取り組みが始まっているところもあります。一方で、福祉分野に限定された事業だけでは地域課題への有効な対応が難しくなっているという現状もあります。本調査では、障害のある人たちの仕事や日々の活動内容の現状と、地域社会との連携の必要性を調査・分析す

るとともに、有効となりうるような地域にある資源（人やもの、スキルや伝統）を掘り起こしていきたいと考え実施しました。芸術・文化活動が障害者にとって、感性の開発と地域との連携になっている状況もうかがえました。

【調査概要】

調査の目的：福祉施設における芸術・文化活動の実態ならびに意識を調査し、現状を把握。

施設の運営基盤と関連して社会との連携あり方を探る。

調査の対象：岡山県内の施設、作業所、学校、全国から抽出した団体

調査の実施時期：平成22年1月22日～2月21日

調査方法：郵送によるアンケート

調査対象期間：平成21年度（2009年4月1日から回答日当日）

実施団体：NPO ハート・アート・おかやま

有効回答数：130

有効回答率：41%

図表中の「N=000」は母数で、N=100%となる。

「SA」は単独回答、「MA」は複数回答

注）無断転載を禁ず。

01 芸術・文化活動（創造的活動）の実施状況 (SA/N=120)

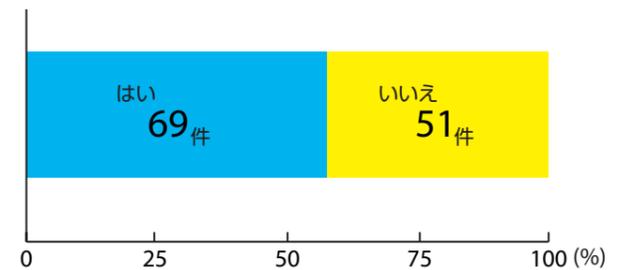
芸術・文化活動（創造的活動）を実施している施設は69か所

——有効回答施設 120

そのうち2009年度に芸術・文化活動（創造的活動）を「行っている」と回答した施設は69件、「行っていない」と回答した施設は51件であった。

——調査回答施設における芸術・文化活動（創造的活動）の実施率は53%であった。調査対象施設における実施率（無回答施設をすべて未実施とみなす場合）は47%であった。

■ 現在、芸術・文化活動にとりこんでいますか？ 《図1》



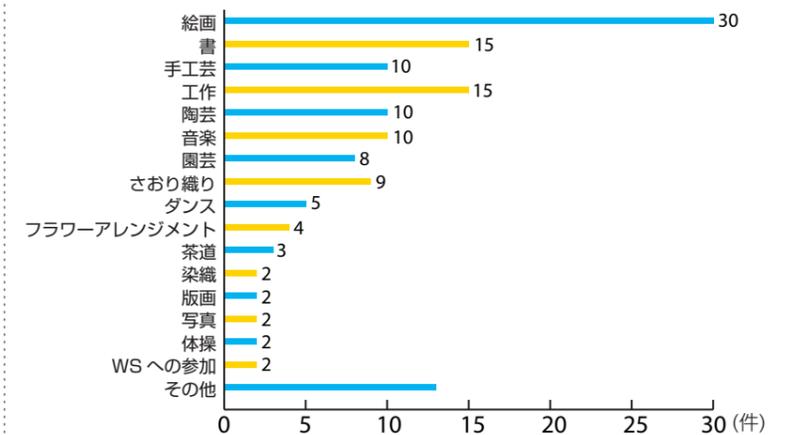
02 芸術・文化活動（創造的活動）の内容 (MA)

絵画が最多。書、工作と続く

——施設での芸術・文化活動の分野を実施施設ベースで見ると「絵画」（21%）が最も多かった。次いで、「書」（11%）「工作」（11%）となった。

——回答施設の約8割が、複数の分野で芸術・文化活動を行っている。その他（野菜作り、車椅子サッカー、ポッチャー、押し花、ポーセラーツ教室、環境整備、バードウォッチング、ファイヤーアート、紙すき、スポーツ、レクリエーション、伝統の踊り）

■ それはどのような内容ですか？ 《図2》

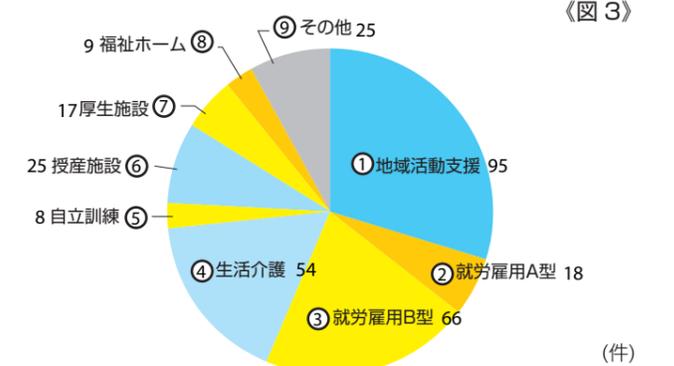


03 岡山県内の福祉施設の種別 (SA/N=317)

障害者自立支援法施行以降に出来た施設「地域活動支援センター」が最も多い

——岡山県保健福祉部（岡山県福祉施設情報ポータルサイト参照）障害者自立支援法、旧知的障害者福祉法、旧身体障害者福祉法による分類。

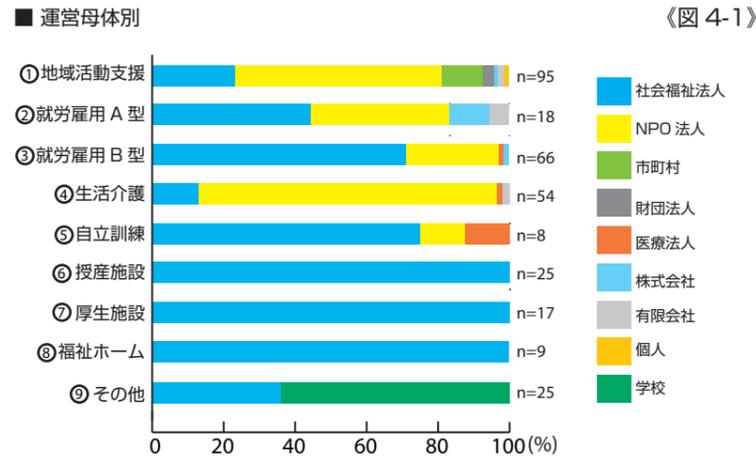
■ 岡山県内の福祉施設の総数 《図3》



04-1 福祉施設の運営基盤状況

運営の多様化が進む状況。

——障害者自立支援法施行以降に設立した施設については、社会福祉法人以外のNPO法人、企業などにより運営されているところが多い。



04-2 工賃と仕事の内容

障害福祉サービス事業所（就労継続支援（A型））については、月平均が6万円を超えている。

——障害者自立支援法第5条による、障害福祉サービス事業所（就労継続支援（A型））では、通常の事業所に雇用されることが困難な障害者が、雇用契約の締結等による就労の機会が提供されている。

■ 工賃・仕事内容を含む表

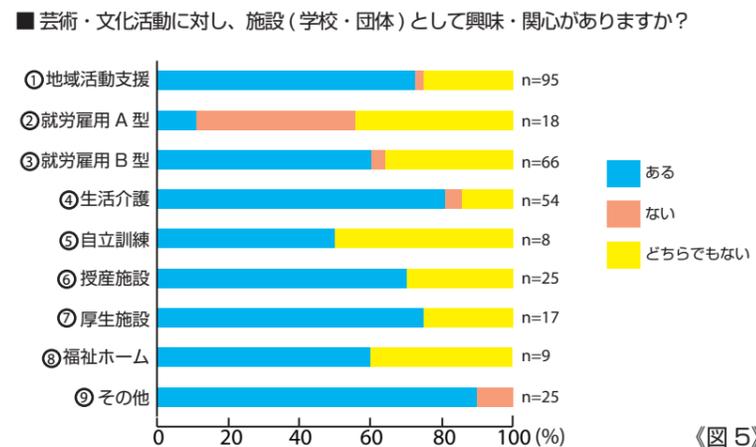
《図 4-2》

施設種別	ある		ない		未記入	回答数	仕事内容
	件数	平均額(円)	件数	件数			
①	22	5900	14	5	5	41	箱おり、手芸、箸袋詰め、清掃作業、農園作業、等
②	7	66800	0	2	2	9	飲食サービス、環境整備、園芸、クリーニング、等
③	23	11000	2	3	3	28	地方企業請負作業、農園作業、手工芸品作業、等
④	9	8400	12	3	3	24	農園作業、創作活動、リサイクル、食品加工、等
⑤	1	10000	0	1	1	2	生活訓練
⑥	9	11800	1	1	1	11	食品加工、環境整備、印刷、農園作業、委託作業、等
⑦	1	500	5	2	2	8	農園作業、リサイクル、クリーニング、委託作業、等
⑧	0	0	5	1	1	6	創作活動、訓練、等
⑨	0	0	9	4	4	13	農園作業、陶芸、学習、創作クラブ活動、等

05 芸術・文化活動（創造的活動）についての興味・関心

障害福祉サービス事業所（就労継続支援（A型））では、芸術・文化活動への関心度は低い。

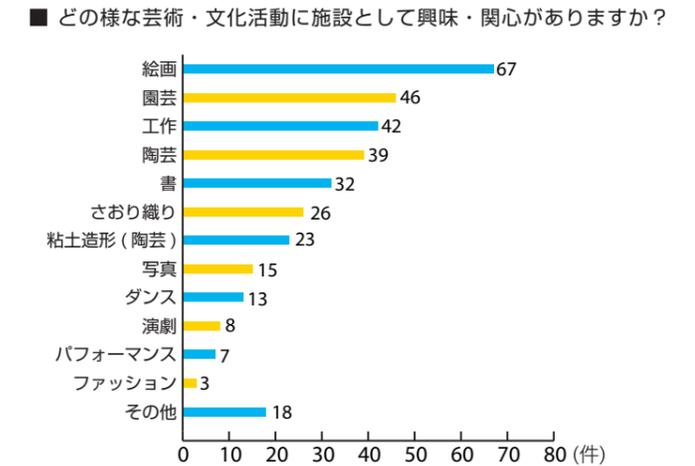
——就労雇用という明確な目的のもとに運営されていることから、ここだけ関心度が異なる。



06 興味・関心のある芸術・文化活動（MA）

多くの分野に関心がある。

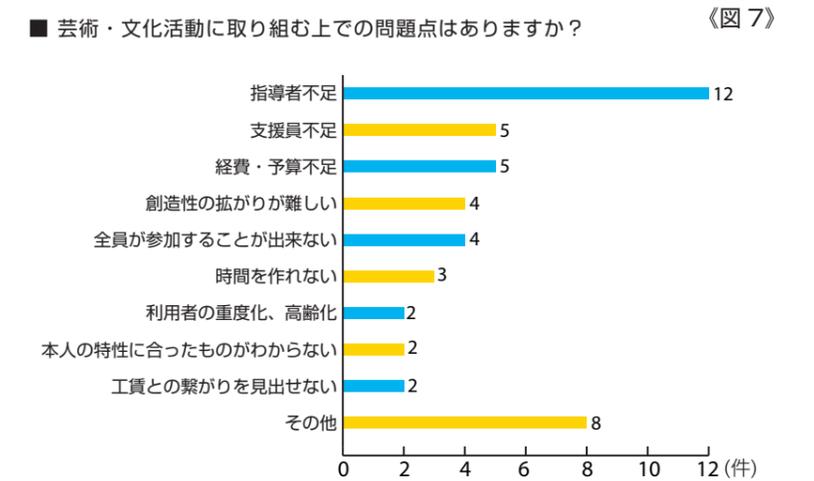
——多いものから順に、【絵画 67件】、【園芸 46件】、【工作 42件】、【陶芸 39件】であった。



07 芸術・文化活動に取り組む上での問題点（MA）

指導者、支援員（スタッフ）の不足が支障のトップ。

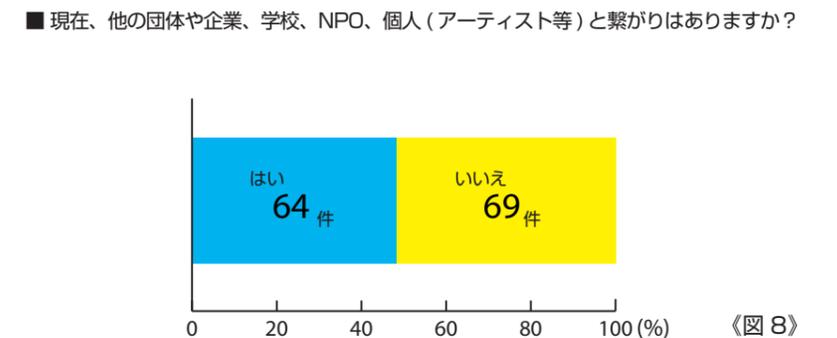
——施設内で芸術・文化活動に取り組む上での問題点があると回答した施設は47件で、その内訳は、【指導者不足 12件】、【支援員不足 5件】、【経費予算不足 5件】であった。



08 地域、他の団体や企業などとの芸術・文化の連携事業の実態（SA/N=133）

「地域との連携」がある施設は64件。

——地域との連携がある施設は約半数にも上る。

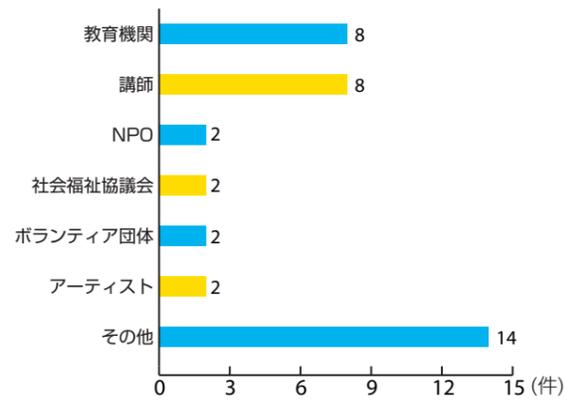


09 連携先団体・個人の状況 (SA/N=64) 連携している団体・個人は多岐にわたる

——地域の教育機関との連携が8件ある。
——その他の回答：岡山/バラ会、園芸福祉協会、日本3B協会、さをり織り団体、ちぎり絵愛好会など地域性が豊か。

■ 図8より回答【ある】の内容

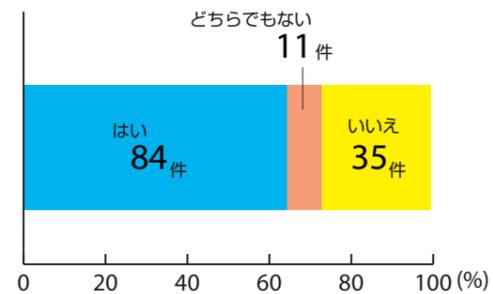
《図9》



10 地域、他の団体や企業などとの芸術・文化の連携事業の希望 (SA/N=130) 連携を希望する施設は84件 (65%)

——連携を希望する回答が圧倒的に多く、芸術・文化活動の機会が切望されている。

■ 地域や他団体などとの芸術・文化の連携事業の機会が増えることや継続していくことを望みますか？



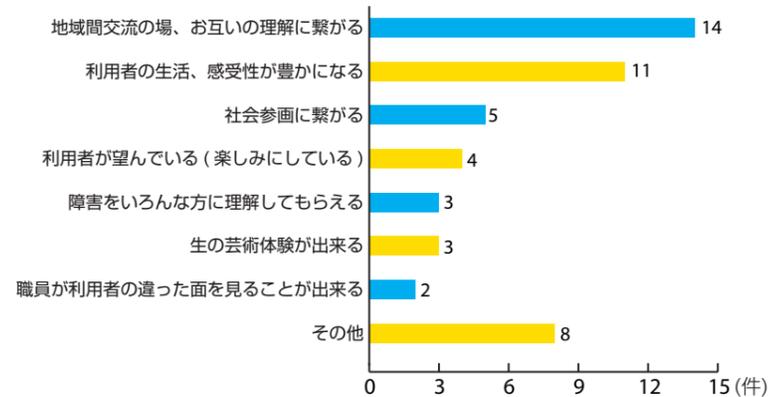
《図10》

11 連携を希望する理由 (MA) 「地域交流」「施設利用者の感性開発」

——今後も施設における芸術・文化活動を他団体と連携して実施したい理由について尋ねたところ、「地域間の交流となる」「施設の利用者の感性の発達により」となった。施設の日常活動に芸術・文化の領域を盛り込むことが施設の運営にとって重要な位置づけにあることが分かった。

■ 図10より回答【はい】の理由

《図5》

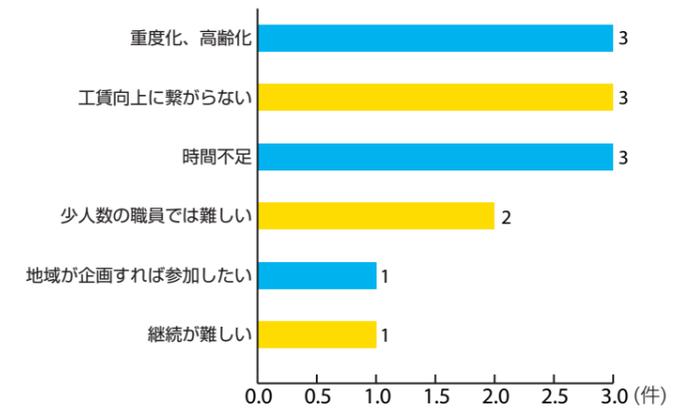


12 芸術・文化活動の連携に支障をきたす理由 (MA) 「障害者の重度化・高齢化」「工賃に繋がらない」「時間の不足」

——「障害者の重度化・高齢化」「工賃に繋がらない」「時間の不足」が同じく3件の回答。ここでは、人員の不足も支障をきたす理由とされる。

■ 図10より回答【いいえ】【どちらでもない】の理由

《図12》



障害者施設の分類

(岡山県福祉施設情報ポータルサイト参照)

障害者自立支援法、身体障害者福祉法、知的障害者福祉法、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律に基づき設置、運営される施設、事業所。障害者及び障害児がその有する能力及び適性に応じ、自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、必要な障害福祉サービスに係る給付その他の支援を行い、もって障害者及び障害児の福祉の増進を図るとともに、障害の有無にかかわらず国民が相互に人格と個性を尊重し安心して暮らすことのできる地域社会の実現に寄与することを目的としている。(障害者自立支援法第1条より)

① 地域活動支援センター

障害者等を通わせ、創作的活動又は生産活動の機会の提供、社会との交流の促進その他の厚生労働省令で定める便宜を供与する施設…障害者自立支援法第5条

② 障害福祉サービス事業所(就労継続支援(A型))

通常の事業所に雇用されることが困難な障害者につき、雇用契約の締結等による就労の機会を提供するとともに、生産活動その他の活動の提供を通じて、その知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

③ 障害福祉サービス事業所(就労継続支援(B型))

通常の事業所に雇用されることが困難な障害者につき、就労の機会を提供するとともに、生産活動その他の活動の提供を通じて、その知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

④ 福祉サービス事業所(生活介護)

常時介護を要する障害者として厚生労働省令で定める者につき、主として昼間において、障害者支援施設その他の厚生労働省令で定める施設において行われる入浴、排せつ又は食事の介護、創作的活動又は生産活動の機会の提供その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

障害者施設の種類(岡山県福祉施設情報ポータルサイト参照)

障害者自立支援法、身体障害者福祉法、知的障害者福祉法、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律に基づき設置、運営される施設、事業所。障害者及び障害児がその有する能力及び適性に応じ、自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、必要な障害福祉サービスに係る給付その他の支援を行い、もって障害者及び障害児の福祉の増進を図るとともに、障害の有無にかかわらず国民が相互に人格と個性を尊重し安心して暮らすことのできる地域社会の実現に寄与することを目的としている。(障害者自立支援法第1条より)

【1】 [地域活動支援センター](#)

障害者等を通わせ、創作的活動又は生産活動の機会の提供、社会との交流の促進その他の厚生労働省令で定める便宜を供与する施設…障害者自立支援法第5条

【2】 [障害福祉サービス事業所\(就労継続支援\(A型\)\)](#)

通常の事業所に雇用されることが困難な障害者につき、雇用契約の締結等による就労の機会を提供するとともに、生産活動その他の活動の提供を通じて、その知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

【3】 [障害福祉サービス事業所\(就労継続支援\(B型\)\)](#)

通常の事業所に雇用されることが困難な障害者につき、就労の機会を提供するとともに、生産活動その他の活動の提供を通じて、その知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

【4】 [福祉サービス事業所\(生活介護\)](#)

常時介護を要する障害者として厚生労働省令で定める者につき、主として昼間において、障害者支援施設その他の厚生労働省令で定める施設において行われる入浴、排せつ又は食事の介護、創作的活動又は生産活動の機会の提供その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

【5】 [障害福祉サービス事業所\(自立訓練\)](#)

障害者につき、自立した日常生活又は社会生活を営む事ができるよう、厚生労働省令で定める期間にわたり、身体機能又は生活能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

【6】 [身体障害者授産施設](#) [身体障害者通所授産施設](#) [身体障害者通所授産施設\(分場\)](#)

身体障害者で雇用されることが困難なもの又は生活に困窮するもの等を入所させて、必要な訓練を行い、職業を与えて自活させる施設…旧身体障害者福祉法第31条

身体障害者であって雇用されることの困難なもの等を通所させて、必要な訓練を行い、かつ、職業を与え、その自立を促進する施設であって、常時利用する者が20人未満である施設…旧身体障害者福祉法第31条

[知的障害者授産施設](#) [知的障害者通所授産施設](#) [知的障害者授産施設\(分場\)](#)

18歳以上の知的障害者であって、雇用されることが困難なものを入所(通所)させて、自活に必要な訓練を行うとともに、職業を与えて自活させる施設…旧知的障害者福祉法第21条の7

[知的障害者小規模通所授産施設](#)

18歳以上の知的障害者であって、雇用されることが困難なものを入所(通所)させて、自活に必要な訓練を行うとともに、職業を与えて自活させる施設で定員が20人未満のもの…旧知的障害者福祉法第21条の7

[精神障害者小規模通所授産施設](#)

相当程度の作業能力を有する精神障害者に利用させ、生活の場を提供するとともに必要な訓練及び指導を行い、その自活の促進を図る施設であって、常時利用する者が20人未満のもの…旧精神保健及び精神障害者福祉に関する法律第50条の2

【7】 [知的障害者入所更生施設](#) [知的障害者通所更生施設](#) [知的障害者入所更生施設\(分場\)](#)

18歳以上の知的障害者を入所(通所)させて、これを保護するとともに、その更生に必要な指導及び訓練を行う施設…旧知的障害者福祉法第21条の6

[肢体不自由者更生施設](#)

身体障害者更生施設のうち肢体不自由者を入所(通所)させて、その更生に必要な治療及び訓練を行う施設…旧身体障害者福祉法第29条

【8】 [福祉ホーム](#)

現に住居を求めている障害者につき、低額な料金で、居室その他の設備を利用させるとともに、日常生活に必要な便宜を供与する施設…障害者自立支援法第5条

【9】 [障害福祉サービス事業所\(児童デイサービス\)](#)

障害児につき、児童福祉法第43条の3に規定する肢体不自由児施設その他の厚生労働省令で定める施設に通わせ、日常生活における基本的な動作の指導、集団生活への適応訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

[障害福祉サービス事業所\(居宅介護\)](#)

障害者等につき、居宅において入浴、排せつ又は食事の介護その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

[障害福祉サービス事業所\(重度訪問介護\)](#)

重度の肢体不自由者であって常時介護を要する障害者につき、居宅における入浴、排せつ又は食事の介護その他の厚生労働省令で定める便宜及び外出時における移動中の介護を総合的に供与すること…障害者自立支援法第5条

[障害福祉サービス事業所\(行動援護\)](#)

知的障害又は精神障害により行動上著しい困難を有する障害者等であって常時介護を要するものにつき、当該障害者等が行動する際に生じ得る危険を回避するために必要な援護、外出時における移動中の介護その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

[障害福祉サービス事業所\(療養介護\)](#)

医療を要する障害者であって常時介護を要するものとして厚生労働省令で定めるものにつき、主として昼間において、病院その他の厚生労働省令で定める施設において行われる機能訓練、療養上の管理、看護、医学的管理の下における介護及び日常生活上の世話の供与をいい、「療養介護医療」とは、療養介護のうち医療に係るものをいう…障害者自立支援法第5条

[障害福祉サービス事業所\(短期入所\)](#)

居宅においてその介護を行う者の疾病その他の理由により、障害者支援施設その他の厚生労働省令で定める施設への短期間の入所を必要とする障害者等につき、当該施設に短期間の入所をさせ、入浴、排せつ又は食事の介護その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

[障害福祉サービス事業所\(重度障害者等包括支援\)](#)

常時介護を要する障害者等であって、その介護の必要の程度が著しく高いものとして厚生労働省令で定めるものにつき、居宅介護その他の厚生労働省令で定める障害福祉サービスを包括的に提供すること…障害者自立支援法第5条

[障害福祉サービス事業所\(共同生活介護\)](#)

障害者につき、主として夜間において、共同生活を営むべき住居において入浴、排せつ又は食事の介護その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

障害福祉サービス事業所(宿泊型自立訓練)

自立訓練(生活訓練)のうち利用者に対して居室その他の設備において、家事等の日常生活能力を向上するための支援を行うもの…障害者自立支援法第5条

障害福祉サービス事業所(自立訓練)

障害者につき、自立した日常生活又は社会生活を営む事ができるよう、厚生労働省令で定める期間にわたり、身体機能又は生活能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

障害福祉サービス事業所(就労移行支援)

就労を希望する障害者につき、厚生労働省令で定める期間にわたり、生産活動その他の活動の機会の提供を通じて、就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

障害福祉サービス事業所(就労移行支援)

就労を希望する障害者につき、厚生労働省令で定める期間にわたり、生産活動その他の活動の機会の提供を通じて、就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

障害福祉サービス事業所(共同生活援助)

地域において共同生活を営むのに支障のない障害者につき、主として夜間において、共同生活を営むべき住居において相談その他の日常生活上の援助を行うこと…障害者自立支援法第5条

相談支援事業所(障害者自立支援法)

障害者等や介護を行う者からの相談に応じ、必要な情報の提供及び助言を行い、併せて市町村及び指定障害福祉サービス事業者等との連絡調整その他の厚生労働省で定める便宜を総合的に供与すること。また、支給決定障害者等が障害福祉サービスを適切に利用することができるよう、サービス利用計画を作成するとともに、計画に基づくサービスの提供が確保されるよう、指定障害福祉サービス事業所等との連絡調整その他の便宜を供与すること…障害者自立支援法第5条

「福祉の現場での活動についての グループインタビュー」

実施日：2010年3月3日(水)14:00～15:30 (1回目)

4日(木)11:00～12:30 (2回目)

10日(水)14:00～15:30(3回目)

会場：アートリンクセンター

出席者 1回目)

- A：NPO 法人地域活動支援センター 職員
- B：社会福祉法人 児童デイサービス 支援員
- C：NPO 法人（就労継続雇用支援 B 型）所長
- D：NPO 法人（就労継続雇用支援 B 型）支援員
- E：岡山県共同募金会 事務局

2回目)

- F：社会福祉法人 身体障害者療護施設 職員
- G：NPO 法人 生活支援センター 事務局長
- H：社会福祉法人 社会就労センター 支援員

3回目)

- I：社会福祉法人 生活介護 支援員
- J：NPO 法人地域活動支援センター 施設長

調査内容

(1)文化・芸術による施設と地域交流の現状把握

- A：作業のほかには、主にさをり織りをしている。展示会をしたり、地域の祭りやイベントでのバザーへ出すための、小物作りをボランティアで地域の人に関わってる。
- B：施設が子ども対象のため、工賃や仕事には直結しないが、文化的なものやアートに関わっていきながら成長していった子どもを数年後に見ると、かなり良い部分が伸びている。
- C：障害の分野は様々で、地域の企業と連携して、仕事や文化的な活動をしている。活動が町おこしに繋がればいいと思うが、街に活気がない。逆に、高齢者は元気なので、もっと面白いことをしていきたい。
- D：養鶏場から直接卵をもらってクッキーを作っているが、パッケージのデザインをしていないこともあり、ブランディングが出来ていない。
- E：岡山県内の障害者施設の実情や、毎日の様子などを知ることがあまりなく、こういう場があると具体的な支援を考える良い機会となる。
- F：高齢者が中心の施設で、新しい活動よりも継続して行えることを探している。地域の幼稚園や学校とのつながりが、利用者らにも喜ばれている。
- G：地元の人の声が集まって出来た施設で、出来て新しいこともあり、地元の農家や高齢者らと花や野菜を作っている。小物の制作やバザーも協力的。
- H：地元で伝わる伝統の織りでできた端切れで小物を作っている。希望者だけが会が活動を入れていて、今度市役所で展示をする予定。
- I：職員の異動により、出来ていたはずのことが出来にくくなる人がいる。その人たちが出来ることを生かした作品づくりで、小物づくりや陶芸をしている。食品として、パンやせんべいを焼いているが、受注から発送までの工程が職員中心となるので大変。
- J：有機農法で育てた牛の牛乳の販売を継続して行っているが、販路の拡大が難しい。作業中心でなかなか文化的な

ことが出来ていない。

(2)地域交流の効果・ニーズについて

- A：地域の公共の建物や駅などで、継続して展示できればより多くの人の目にとまると考える。
- B：連れてくる親への指導というか、障害児の子育ての見通しを持たせることが必要。子どもたちへの関わりは職員が行うが、親への関わりを外部の人や、子育てを終えた世代の親たちが出来ればいいと考える。
- C：開発したものを商標登録したり、売れているものの調査をしてみると、まだまだ仕事になりそうな分野がある。一つの作業所では受注できなくても、地域の作業所を繋いで行けば、商品として出せるものが出来ると思う。今は、100均の店に行けば、なんでも買える時代になっている。1点ものという視点で、手作りのもの（エコマグネット）を作っている。
- D：地域のおかみさん会や大学生など人材はいるのだが、連携が出来ていない。何か出来ればとは思うけど、なかなか思いつかない。
- F：交通の便利が悪い所に施設があるので、関係者以外の人に来ない。
- G：利用者らと食事の提供をしているが、普通の人も食べに来てもらえるような工夫がいる。
- H：学生や若い人との関わりがあまりない。メンバーの年齢は若く、出来る作品も面白いものがあるが、これをどのように展開していくか、それと、そこからどのように工賃と繋げていくかがこれからの課題。
- I：施設内にある設備を使った染色や織物の講座はあるが、関わる人が保護者らで、あまり地域の人は入ってこない。
- J：協力農家や酪農業者らが高齢化してきており、この先いつまで創業するのが不安。出来るだけ継続を望んでいる。濃厚でこだわりの牛乳なので、うまく加工品を作れないかと考えるが、なかなか実現できない。

(3)現状での課題・解決方法について

- A：関わる人の輪が広がりにくい。年齢の高い人や、そのグループの人たちに集中している。織物の端切れが多く出て、そのよい活用を考えている。

- B：世代を超えた交流が出来にくい、必要と思っている。
- C：他の作業所や社会福祉法人が何をしているのかが分からない。こういうグループ討議出来る場があるといい。
- D：地元のバザーが販路の中心であって、常に地域の関わりが必要。作り手の喜びが伝わらず、仕事中心で、あまり楽しそうでない。
- F：アーティストや指導してくれる人が、回数は少なくともいいから継続して関わってほしい。施設は、肢体不自由の人が多くいるので、その人にあった道具などが開発されたいと思う。
- G：地域の物産と一緒に、もっと地域のものを買ってもらえる仕組みを作っていきたい。
- H：近づいている展示を通して、地域の人が関心を持ってくれればいいと思っている。
- I：普通の雑貨屋に商品を置いてもらっているが、福祉の店だけでなく一般の人が買ってくれる所を増やしていきたい。だが、施設は生活介護なので、商品が売れても作業の工賃が本人に入らない。ちょっとでも本人に還元できればと思う。
- J：自分のところの製品や、商品を配達する時に、他の施設のものカタログなどを一緒に配ると言うことが可能。新しい販路拡大になると思う。

グループインタビューを終えて

施設間の交流が実はあまりないことが分かってきた。インタビュー中の意見でも出たが、一つの施設だけでは、福祉の現場から生まれた商品を流通に乗せることは困難でも、他の施設や地域の企業と提携すれば、互いの可能性を広げていくことが出来る。合わせて、販路の拡大についても、広報活動が十分でないことから、関わる人が固定化している。地域やその人の繋がり、住んでいる人の日常に焦点を当てていくことで、日ごろ行っている施設内での活動が活力あるものになると考えられる。グループインタビューに参加した施設の文化的活動では、その施設の内情により大幅に開きがある。それぞれの施設や地域において、ミッションや活動をコーディネートしていく中間組織の必要性を感じた。

「社会と福祉の繋ぎ方」

【対談】

財団法人たんぼぼの家理事長

播磨 靖夫

NPO 法人クリエイティブサポートレッツ理事長

久保田 翠



この日は、文化庁の芸術選奨の新聞発表日で、播磨さんは芸術振興の部門でご受賞！

文化としての受賞ということが、私たちも非常に嬉しいです。

何よりうれしいのは、障害のある人の表現を文化活動として認めてもらえたということに対して、播磨さんは、障害のある人の表現は人を結ぶ力があるということを認められたということで、「代表していただきます」とのことでした。

今回は円卓を囲んでのトークです。

円卓がここにある理由っていうのは、アートリンクから派生した展示で、トランプを作り、参加者全員で遊ぶことを展示とした山本さんと湯月さんの作品展示のときのものでした。

「上座がないということでいいね」と播磨さん。

田野：これまで障害の人の表現を新しい価値を社会に提示するものとして活動されてきた播磨さんと、この春から新しくことを起こそうとしている久保田さんをお呼びしてのトークです。宜しくお願いします。

播磨：久保田さんは建築の人で、まさに「直線」の人ですね、もっと緩やかに回り道とか方法はあるだろうに、直線に走る。

僕は基本的には文化の人です。日本には二つ文化があって一つはものをつくる制作文化。もう一つは醸造文化とか発酵文化。欧米型の文化は物を作る文化なんです。作るというのは人偏に乍(ながら)って書くでしょ。人工的に作る。こういうやり方は必要な時もあるけど、ベースは醸造文化・発酵文化ですね。ゆっくりと成る・生む・結ぶですよ。岡山は人が集まって、アートリンクになり、そこから人が結び、そしてまたそこから何かを生み出すということをしている。文化ですよ。

僕は、たんぼぼの家を作るときは、そんなことばかりしていると時間がかかるので、制作文化、目標を設定してシステムアプローチですよ完全に。これは短期間にまとめていける。一方では、文化で人が集まってきてワイワイやっているうちに勝手に発酵して、何か生まれる。

この二つを使い分けていくことが必要ですね。地域でやる場合はね。直線ばかりやると人がびっくりして、引いてしまって「何か別のことだった」ということにもなりかねない。いろんな人が関わっているうちに物語が変わっていったりするでしょ。出会ったことによって別の方向に行ったりね。これが楽しいね。それをベースにした方がいいんじゃないかといつもアドバイスするんですね。久保田さんのところにもいろんな面白い人が来るからね。田野さんがうまいのは、そこから新しい物語を作り出しているんな形になっていく。たんぼぼの家にも非常に似ているところがあって、僕の言葉で、「一にして多、多にして一」多くの事やっているけど一つの事をしている。これを鷺田清一さんにしたら「播磨さん、それは西田哲学ですね」と言われた。実は東大寺の法華経

にもそういう考え方がある。東洋の文化的な考え方をベースにするという、知らず知らずにそういう発想を持っていたという。岡山のアートリンクが発展して、そういう考え方しているから、発酵している訳やね。それをあまり管理したらいかんやね。切ってしまうことになるからね。今の NPO 評価からいえば、曖昧できちっとしていないといわれるけれども大事なことなので、言葉を持つといいね。

たけし文化センターも目的ははっきりしているけど発酵まで行っていないね。いろんな人が出入りしているけれど、そこから発酵していく、何か生み出すというものが生まれてきたらダイナミズムが生まれる。偶然を必然に変えるダイナミズムというのが我々のところには必要なのね。今は手一杯だとか、それはうちの方針とは違いか言うのではなく、まずは受け入れてみて展開してみると。そのあとで駄目なものは捨てていったらいいわけで。いろんな偶然が生まれるような環境をつくっていく、必然を生む空間のマネジメントみたいなことであっていいんじゃないかと思うのね。

久保田： 苦手かも知れません。

田野： 直球ストレートで、今何をやろうとしているのか教えてください。

久保田： 私のところは、たけし文化センターを去年の暮れに実験事業としてやったんです。活動自体は 10 年しているんですが、その中で 4 回も引っ越しをしているんです。いつも 3 年くらいで動いちゃうんです。動かたくて動くのではないんですが。初めのうちはうちの子どもが小さくて、他の人の建物を借りていたんです。相手の人は、そろそろ学齢期を終えて、その後の過ごし方として、施設として子どもとずっと一緒にいられる施設か、子どもと親は別にいるべきかで意見が合わなくなった。そして私が出たんです。その後、近くに場所を借りて始めたら、子どもたちがいっぱい来始めたんです。そうしたら、浜松は車社会で、送り迎えで親の車がいっぱい来るんです。車が置いて大勢の人が来る。広くて、汚しても騒いでも大丈夫でな処で、しかもあまり田舎には行きたくない

という条件で探したんです。当時の家賃 1 5 万円が払えなかったんです。結局そこは 6 カ月しかいられなくて、資金が必要ということで NPO を作っている人から支援してもらいながら助成金にも申請しないと駄目だなと。そういう状態を伝えたら、企業を運営されている理事から「すぐ撤退！」と言われて、一時自宅ですべてです。そうするともの見事に人がいなくなっていった。20 人くらいだけ残って細々とやっていたんですが、とにかく場所があると。そういう中で、浜松市が国の施設を福祉施設にするという情報が入ったので、私は企画書を書くのが好きなもんだから、そこに入って 5 年間活動したのです。その時に入った場所が、1 階にレストランの大きな厨房施設も付いていたので、それを活用するというで入ったにもかかわらず、全然使ってはいませんが、創作活動は、ここで 5 年間していたんです。ここでの経験は貴重で、人を雇わなきゃ駄目だと思ったんです。私には当事者で、どうしても子どもがいるから限界があるんですね。疲弊しちゃうんですね、自分が。できないところは人にまかせなきゃ、となると助成金を書いてお金を得なきゃということになった。

播磨： 外国人と交流して、食とアートをやるとか書いてあったけどね。

田野： この春には、今いるところを出るの？

久保田： そうなんです。本当に思うんですが、福祉メニューをできない場所なんです。私たちは無償で借りているんですね。市の財政が、市民財産と普通財産に分かれていて、市民財産のところなんで、お金を払ってでもやりたいと再三申し上げていても、できないんです。基本的に NPO に対して軽く扱う。浜松には大きなしっかりした法人があるから、サービスはそこでやればいいと。播磨さんが 40 年かけて文化として築かれたけど、浜松は、福祉とか文化とか分かれた状態ですね。障害福祉課は「文化ですよ」と、文化振興課は「福祉ですよ」という。ある意味助成金は大変ですよ。

播磨： 助成金頼みは大変ですね。持続可能な方法を模索しなきゃ。今度福祉施設をつくるの？

久保田：NPOで、自立支援施設をします。

播磨：それで、経営の地盤が得出来るね。プラスαを考えなきゃね。

久保田：たけし文化センターは福祉施設を作ろうとしてやった事業ではなくて、これは実は私が作ったコンセプトではないんです。私は、最初から施設をやりたいわけではなくて、障害のある人の表現は非常に個性的で、ユニークで、彼らを基軸にしているんな人がやってくることが出来るなと思っていました。彼らもほっとくつろげる場所を作れば、いろんな人もくつろげるなど、実感してきたんですね。だから、皆が来られる場所とか、居場所づくりとか思ってやってきたんだけど、二人のアーティスト・鈴木一郎太と深沢貴史という二人が「たけし文化センター」としてアートワークとして落とし込んで行ったんです。もはや、NPO法人クリエイティブサポートレッツという名前が必要ないのではというくらい、ここでやりたいことをたけし文化センターでできるという、アートプロジェクトにしているってことです。となると、中心市街地にないと困るというよりも、いろんな人に来ていただける場所にあつた方がいいということで、障害の人がいてもいなくてもいいんだけど、でも常に彼らが基軸となっていて自由に使える場所を6ヶ月間、文化政策からお金をもらっていて、厚労省からもお金をもらって実験事業を行っているんですよ。たけし文化センターという、真剣に公共機関を作る。というの、うちのたけしは、障害が重いというか、行動がかなり変わっているでほとんどの公共施設には行けないんです。公共施設って「みんな来てください」というのに、汚しちゃういけない、騒いじゃいけない、人に迷惑かけちゃういけないでしょ。全部該当するんですよ。音楽もすごく好きなんですけど、何度言っても追い出されるんですよ。怒られたらすぐに引き上げるんですけど、何度追い出されても寂しい思いをしていて。だったら、人に迷惑かけてもいい、騒いでもいい、汚してもいいというところをつくろうと思って、それがたけし文化センター。彼がそういうことをしちゃう人なので、その人を尊重す

る場所ということは、それが許されるんですよ。そのコンセプトを聞いたとき初めは「いやだ」と思ったんです。久保田荘という個人の名前を付けるということもそうだけど、障害児の母と自分で名乗りながら、子どもの名前をつけるなんて、なんてバカだと思われると思ったんです。もう、二人のアーティストに「久保田さん、覚悟してください」と言われた。(笑)だからもう、割り切ってプレゼンしてますけど。でも、私はまったくそういう発想はなかったけど、むしろ反対に気づいたんですね。久保田荘の一人の視線を重視するということにもなるんですね。実は、彼個人の視線から始めると、ものすごい普遍性をもつということも知った。その敷居が低いものだから、誰でも来れるということになる。でも世の中の高尚なクラシックが好きとか、デザインされたきれいな空間が好きという人は、たとえ来てもスルーしていつちやうんですね。何だこんな汚い所って感じだね。で、ここもそうですが、場をつくるっていうことは、そこを気に入った人が来るということになる。だけど、障害のある人って本当に場が持てない。福祉施設くらいしかない。でも、そこも居心地がいいのかどうかわからないでしょ。子どもらはね。だから、本当に居心地のいい場をつくりたいんですよ。でも、私の思いとアーティストの思いってちょっと違っているんですよ。私はどうしても障害のところから離れられないんですよ。アーティストは、いろんな人、誰でも来てほしいとっていて。毎週末に、美術部っていうのをやっていて、アーティストの子を呼んで、炬燵を囲んで好きなものをつくっていて、その周りにはまた来た人がいて、好きなものをつくっていていうふうに、けっこういい感じでやっていた。で、来ていた人が、この美術部を受け継いでやっていきたいというんです。で、ちょっとさっきの播磨さんの話を聞いて反省しているんだけど、でもその美術部って障害じゃない人の居場所になっているの。障害の人は全然いないの。

播磨：でも、それも障害とは何かということになりますね。社会に適応しないとかね。そういう人の気持ちも大

切にしないと。

久保田：でもね、場所も提供して、材料も提供して、掃除もスタッフがして。そういう状況で、楽しいからこのまま続けたいって言われてもさあって思っていて。それが態度で出ちゃう。アーティストはそんなこと言わなくても思っている。運営と本当にいろんな誰でも使えるということのせめぎ合いですね。答えを見出してないですね。だから、自分の中では、アートを信頼しているところと、警戒というかわかんないなあと思っているところがある。

播磨：まあね、ロマンティズムを追求しながら、リアリズムにしていけないと潰れるわけですね。僕も経営者として、そういう空間の大切さを求めている人がいるということを知りつつ、一步では持続可能な経営をしていけると夢だけになってしまう。皆が潰れてしまうということになる。いくらいい夢を語っても、継続していくことによって障害のある人も夢を語ってくれるということ、これが大事なことでね。アーティストの考えは、楽しかった、続けたかった、潰れて終わりになったら次に行くこともできる。でも我々はそうはいかんということです。行き場がなくなるわけですからね。そここのところを何年もかけてやってきている訳ですからね。で、とりあえず、収入がある、稼げるものと運営できる基本を確保するということが大事でね。そこから自由度を上げていくという、クールヘッドにウォームハートで、そういう経営戦略があるんですね。それは何かということです。自立支援法でそのお金を資金源にしていくというだけではだめで、あれも制度に則ったサービスを提供してもらえるお金ですね。アートは余分なものだからね。だからその分の稼ぎをしていかならんね。ここでは浜松の話ですが、私は奈良ですし、岡山はどうなのかな。行政なんですよ。奈良は、我々は行政を全くあてにしないんですよ。「自分たちがやります」って。行政からみてもかわいくないんですよ、こんな冷たい態度を取るとね。不細工な犬でも尻尾降ったらかわいいやろと(笑)。「理事長は行ったら喧嘩するからって行くな」って言わ

れる。あてにできないから、全部自分たちでやる。それは対社会というか、奈良市民、奈良県民、全国の人が支えてくれた。それと、いろんな助成金とか。我々のたんぼぼの家は企業と組むのがうまいんですよ。エイブルアートは7年間トヨタ自動車と組み、オンステージは明治安田生命、近畿労金は10年目で終わるんですよ。全国統合して組織が変わるからね。ここでは多いときは800~500万円。そこで、「ひと・アート・まち」という実験を街でやった。関電も。住友生命、ゼロックスも。奈良にはそんな企業はないですよ、東京や大阪にプレゼンしに行つて。企業は何がやりたいかということキャッチして提案をするわけですよ。企業は助成金と違って、単年度ではないんですよ。組み出したら長いんです。安定したスポンサーですね。これは覚えたほうがいいと思うんです。助成金は悪く言えば作文になる。報告書を出してお金だけきちんとする。それは恐ろしい。浜松なんて、スズキやヤマハなど大きな企業があるでしょ。昨年、メセナで明治安田生命が賞をもらったでしょ。近畿労金なんて文化庁長官賞もらったでしょ。だから、外部の団体と組んだらいいことがある、評価がほしい、企業としてのブランディングが上がっていくわけですよ。

田野：大きな意味での広報ですよ。

播磨：そうそう。だから、うちでできないものを他でどうですかと進めていくことが資金源となるんですよ。それと、地元の小さなスポンサーでも、協力者を集めるということ。例えば信用金庫。大きな銀行はやらなくても、小さな銀行は応援してくれる。うちの財団は大変ですよ。寄付は社会福祉があるからそっちに行くんです。財団は赤字になってね。そこで事業計画書を書いただけで貸していただいて、住宅ローン形式で毎年少しづつ返していくということを向こうから提案してくれて。そりゃあ、いろいろありますよ。そういう協力者は、岡山にも浜松にもあると思いますよ。行政が何もしないと言っているエネルギーがあるなら、企業やファンを抱え込まなきゃいかんと言っている。NPOもいっぱいあるでしょ。だから、抱え込んで企業メセナとか企業と組んで、ブランデ

ィングをしていく。これは一つの潮流になっていくんじゃないかと思っている。企業は何をしたがっているかということを読み込みながら、プレゼンしていく。企業のやりたいことをかたちにしていくということですね。いったんやりだしたら、1年で終わることはない、5年とか、ほとんど10年くらいやっている。ものすごく信頼関係が出来る。毎回申請書出していると、審査する側も「毎回同じところに出すよりも、他のところに出したい」という意見が多く出る。いくらいい活動をしていても、減額されたりされるんですね。だから助成金には賞味期限があることを覚えておくといいですね。企業だけでなく、地域創造とか、経産省とか文科省とか、厚労省以外にもあるのね。おんなじのを出すんじゃないくて、向こうがやりたいことをこちらは同じでも出し方を変えていくということね。これもテクニックとしてある。文化庁とかね、ウイングを広げてね。助成金は財団関係は今は、意欲がなくなっているね。金利も下がっているしね。

そうそう、日本財団がパフォーマンスアーツに金を出すということになったんです。これは我々の功績かも。福祉車両を送ることは昔からやってきたけど、助成の方向性が変わってくることも見ておく必要があるね。状況を見ながら資金が出る方にアンテナを張って。こっちに資金が来ないということを相手を悪く言うんじゃないくて、流れるところに行くということね。そういうリアリズムをきめ細かくやっていくとこですね。後は市民ですよ。レッツも市民が支えてくれる。自分たちが必要な文化だということを組織戦略していくこと。たけし文化センターは、久保田さんのお子さんのためだけじゃなくて市民にとって必要な文化という意識をもってもらおうというプロジェクトをおこなうこと。行政が支えてくれないというんじゃないくて、奈良の市民が障害のある人を支えてくれるという風土が奈良にはあるのね。わたぼうし音楽祭は今年35年ですよ。スポンサーもなにもないのに。奈良県は補助金を一律カットで、音楽祭のもカットでしたが、さすがに悪いと思ったのか10万です、気持ちですね。でもそれが行政から自立してやっていることが、行政が

一目置いてくれている。と思っているんですね。

最近、県が相談にも来ますよ。今度六本木クロッシングで「インクルーシブデザイン」をやるんですが、その直後に打ち合わせ。そこで今度僕がやりたいのは、子どもの演劇教育をやりたい。イギリスは、人権教育の一端でやっているんですよ。そういう発想を教えていくことですね。人権のポスターを作るとかね、しかもちょっとダサイ奴をね。そんな誰も見えてないですよ。生き生きするようなものと人権教育をセットにしなさいというアイデアを出します。憲法の教育とうちの施設の言語障害のある人をセットにする。するとね「あなたはあなたのままでいいんです」と語るんです。そこに弁護士さんが絵本を持って開設するんです。学校を回っているんですが、好評なんです。可能性ですね。「上の人が決める生き方をするのではなく自分で決めなさい」と障害の人が言うと、ものすごく説得力があるんですね。永山さんという舞台監督の人が行っていたんですが、ワークショップしても中学生なんて私らの話は聞いていない。でも言語障害のある人の話は一生懸命に聞いていると。自分らが負けているというんですね。そこをうまく使っている。「あなたはあなたのままでいい」と。正に、たけし文化センターの精神なんですよ。それを憲法の学習に生かす。弁護士さんの絵本による開設と、障害のある人の憲法の朗読というセットで。

アートと言って絵だけやるんじゃないくて、生きていることをよりよく見せることが芸術であると。それを人権教育で憲法というところからやっていく。大切なところで。

人との関わりがアートであるということ。田野さんやれそうね。

たけし文化センターという名前ややることに、こだわって、そこを突き抜けていくことで普遍性を持つ。余り始めから楽しい皆の広場ということにするのではなく、こだわった方がいいと思う。これね、もうちょっと僕からの提案ですが、情報集めとか助成金の集め方とか議論して勉強した方がいいね。日本のアートNPOの弱いのは、

助成金頼みしかないというのね。やっていけない。こういう少人数の現場でマネジメントの会をした方がいいね。

久保田：場所が確保できて、障害の人にいつも来てほしい。でも土日しか来ていない。

参加者 A：いつもはどこにいるんですか？

久保田：月曜から金曜は、学校とか施設ですね。土日しか来ない。

田野：でも、最近は土日もスポーツの会への参加者が増えていて、それぞれ、自由な時間のメニューが増えているようですね。

参加者 A：やることを選べるようになってきた。

播磨：例えば、うちの地域支援センターのプログラムはいろいろありますよ。料理教室とか、化粧教室とか。この前銀座でやったら好評で、知的障害の人がドーナツ屋でアルバイトをしているの。他の従業員はお化粧品をきれいにしているけど、障害の人はお化粧品もしていないし、服もいい加減で、本人も親もそれでいいと思っている。それじゃいかんと。普通に働いて賃金をもらうんですから、きれいにしているお姉さんの横で「私は障害者だからこれでいい」なんていかんということで、化粧品会社の人に協力してもらって、エイブルアートカンパニーの表紙にもなっている。障害のある人もただ来て絵を描くのではなくて。就労とか、働くとかすぐ言うけど、それはおかしいと思うんですね。これからは、学習です。生きてることは学ぶことであるし、学ぶことは生きることなんです。もっと学習権の保障をしていかんか。障害のある人は、養護学校を終わったら、働くことしかない。後は遊びとスポーツとかね。でも人間として学ぶということは非常に大事なことで。もう一つは、障害のある人も高齢になってくるんですよ。古い施設なんか、今までいろんなことが出来ていた人も、だんだん出来なくなってくるんですよ。でも学ぶことはできるんですよ。養護学校を出た後も、学ぶことを生涯学習としていく。特にコミュニケーションで、情報を伝えるとか、感情を伝えるとか、自己表現するとか、人間関係を保つとかを学ぶことが、働くことよりもコミュニケ

ーションの発展の方が人間の社会にはものすごく寄与することになりますからね。底が抜けているんじゃないかと。我々はプロジェクトやりながらそんなことを考えていてね。森永さんと言って、知的障害の人と芝居をやっている役者が言うんですが、役者に施設の中をぶらぶらしてもらって、施設の人にちょっかいを出してくれと言っているんです。それはなぜかという、我々も社会福祉法人で、管理はないんだけど制度化されていく。サービスする人と受ける人という風に。人間関係に潤いが無くなってくるんですね。そういう制度を揺るがすようなアーティストがうろろうした方がいいんじゃないかという実験をしてもらっている。芝居を教えるとか、あんまり考えなくていいと。人間のシステムというのは硬直していきんですよ。そうなるとうるある人は安心して暮らせなくなる。一番効果があったのは障害のある人と関わるよりもスタッフの方で、固まっていたものがほぐれたと。意外なところでサービスになっているんですよ。施設長に言えないこともぼろっと話したりね。それがいいんですね。この人は人畜無害ですからね。評価もする必要ないし、ただ役者ということで話しやすい。それも考えてやっている実験ですね。でも組織とは何かとか、制度とは何かということを知っておかないと、自由な空間とか言う。それを克服していく空間がアート。アートの空間ですね。

田野：その意味では、現代アートと似ていますよね。GO!GO!GO!で売っているレターセットですが、駄洒落日記を書いている友實さんの日記のコピーと、山本さんの交換日記、そしてオノエイジさんの蠅ですね。そのレターセットを開発するときに本人の面白さを残したまま商品を作ろうと。でも、この駄洒落日記は親にとっては「辞めさせたいこと」だったの。それで「殻を脱ぎ捨てさせたい」とおもってアートリンクに参加させたらいいけど、アーティストはそこで関わりのきっかけになって、ますます調子に乗って書いていた。そうやって関わっている人が自然に価値観が変わってくると面白い。

播磨：徳島のガラス工芸の人で、必ず作業をする前に絵

を描かないと始まらないんですね。それは注意されたことを書いているんですね。「作業中に喋るな」とかいったい言われたことを書いているんですね。溜まった注意文章がそれこそが面白い。それを展覧会したらいい。大阪府では、現代アートといってね、アウトサイダーとかアールブリュットとか、抱え込むのはおかしいと。今を生きる同時代のアートで、我々の方が考え込む、詩人になることが必要でね。ここで抱え込んだり回収したりすることがおかしい。人間の存在は不思議であって、そんなに単純なものではないということですよ。

田野：それでね、またお母さんが言うんですよ。施設の仕事もまともにできないのに、またアートルックするのみたいに言われると。でも、人にはわからない人もいるということが分かったと。人の評価ではなくて、自身の評価が出来る。

播磨：「たびお」という靴下屋さんがあるのですが、これが、パルコで大人気なんですね。初めは持ち込んだときに、断られそうだったのですが、会長の鶴の一声で始まった。キャラクターという「たびお」が好きなのですが、若い子に大人気。伊勢丹メンズパンツも大人気です。派手なパンツです。伊勢丹メンズは続きますね。アパレル関係も注目されていますね。

田野：最近は、一点物が大人気ですよ。

播磨：もう、すごい大胆な柄で。

久保田：エイブルアートカンパニーは、ムーブメントをおこそうとしているんですか。

播磨：これは、田野さんがやっているのと近いことで、中間組織をつくったことになる。それぞれの施設で作ったって、企業に売り込んでいくとか、流通のシステムに乗せようとしても、そんなことはできないもの。著作権とかいろいろなこと一杯あるし。それをきちっと管理する中間組織がないということが問題だったのね。それを商談をまとめて商品にしていくと。企業が「こういうイメージで、こういう商品を開発したい」と。それを作家に取り次いでいく。

田野：作家に「ジャマイカのイメージで」というように

依頼する。とてつもなく時間がかかっても、企業が待ってくれると聞きました。

播磨：既成のアーティストやデザイナーに期待できないものを期待しているんですね。それを売り込んでいく中間組織。もう一つは、たんぼぼの家のチロリ。アーツアンドクラフト。ものづくりね。ここも設計しなおして、全国のそういうものを集めてくる中間組織をやる。今、高島屋なんかから話が出ていて、提案できるような情報を集めている。

もう一つは、在庫管理から支出の管理ですね。注文が来ても「無いわ」という大雑把では、マーケットに向かっているのは難しい。だから、今、流通をしていた人にシステムを作ってもらっている。いつでもどこでも誰でもできる、システムを作ってもらっている。

参加者 B：タイミングを逃さない。

播磨：今年いっぱい、チロリで試運転する。そのあとは、講習を受けて、入力していく。

参加者 B：アーティストは大雑把だからな。

播磨：それが出来ないと、マーケットでは難しい。

田野：商標登録はどのようにしているのですか・

播磨：管理料をもらって、管理している。

田野：施設はすぐに真似を始めるし。

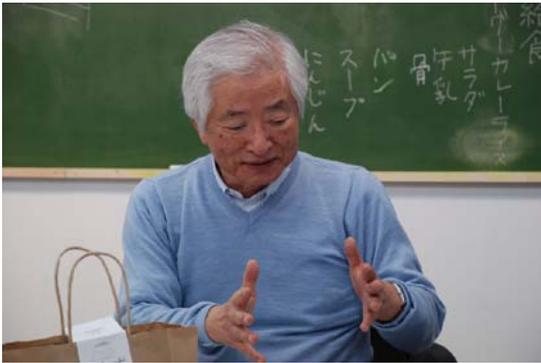
播磨：仮面ライダーとか、規制のものなどあるものを使うと警告が来ますね。裁判になる。

田野：でも、福祉の店では堂々と売っていますよ。

播磨：今までは目こぼし。でも今は徹底的にやられますよ。福祉という人権を守るということをテーマにしているのに、著作権という権利については、いい加減で。他人の権利はきちっと尊重するということをしないと。自己の人権の事については言えない。有るインフラを整理して、きちっと組むということですよ。自分ところだけが一番ということでは、やっていけないですよ。

田野：先日、グループインタビューをしたんですね。そこで出た話では、手織りをやっている作業所の職員が来て、その端切れの処分というか、使い道に困っていた。別の作業所では、地域の端切れタオルからペット用品を

作って販売し流通している。また他では、山の牛乳を宅配している作業所の人が、他の商品のカタログなら、一緒に配達することは可能だという。障害の施設同士の組み方や、広報の協力でいくらかでも可能性は広がると思います。



播磨：成功例として、世田谷区のお酒屋さんが、御用聞きに回っていたのですが、なかなか営業が伸びない。そこで、産直と繋がっていい展開になっている。どちらにもいいことになっている。だから、どう組むかということですね。特に福祉は、I字型からT字型へ広がらないと、壁は破れない。広がるための中間組織・メディエーションを作っていくということですね。その組み合わせ方がうまい人が動き出すと新しい分野になる。社会福祉ということだけで制度の中でだけ生きている人は、社会と対話していない。社会は変わるのに、制度の中で生きている人から、外の人、企業と組むことですが。その壁を越えていかないと。福祉の人は「がんばってる」という。でもみんな頑張っている。精神とか知的とか、身体とか。マイノリティーはエリートですよ。もっと貧困な子どもとか大変な人はいっぱいいますよと。生きるのに困難な人が。そこを越えて、古い言葉ですが連帯というか、そこを越えていくということがいる。

田野：子どもの現場である学校にアーティストと言ったのですが、どこも生きづらい、コミュニケーション障害の子どもとかがいる。何にもできないと思われていた子どもが、面白い表現をしたり、ビデオを取ってきたりして、互いに鑑賞していると、驚きの連続なんですね。そして、その子も「皆が見てくれてうれしかった」と書いて

ている。

播磨：人間にとって一番つらいことは、自分はいなくてもいい存在であると思知らされるほどつらいことはないんですよね。私は必要とされているということを感じ取れたときに、ものすごく人間は変わってきますね。そういうことを算数とか国語とかの強化では分からないわけね。

田野：ある学校の校長が言いましたね。「うちの子どもたちは、田舎の学校なのでシャイなんです」と。ところが、アーティストとのワークショップが終わるときに「子どもたちに表現力がなかったのではなくて、子どもたちの表現力を出すためメディアがあればもっと可能性がある」と。子どもたちを信頼しなおしたということがあったんですが、非常に嬉しかった。文化との出会いは、親や過程の価値基準で決まる。そのバリアを超えられれば、もっと面白いと思う。たけし文化センターが学校とかと繋がれば面白いですね。

久保田：でも、学校に入っていくという手続きが難しい。

播磨：教育委員会はなかなか変わらない。

参加者 B：本当に学校の方は、昔から変わらないです。特に自閉症という障害は、学校の中では受け入れられにくい。でも、個人の表現を評価されることで、うちの子どもはすごく成長した。

久保田：でも、アート NPO のプログラムをやっている人たちは多いじゃないですか。だから、学校に雇われればいいのに。

参加者 B：学校の通常の授業と、アーティストが来た時との違いを先生方が体験してくれたらいいのにと思う。

久保田：そのところをやらないと、変わらないよなと思いますね。私たちみたいに場所を持っていても、実際の現場にはいっぱいそういう子どもがいるのに。

参加者 B：学校の先生はものすごく勉強しているし意欲もあるんだけど、でも現場では制度の中で他の人とかと組むということが出来にくいというか解決できない。

久保田：さっき障害のある人はエリートだと言ったけれど、本当にそうで、障害児はいろんな制度の中で守られ

ているんですね。でも、いつの時代もアーティストは霞を食べて生きているように思われていて、でも今の時代にアーティストの役割っていっぱいあると思うんです。これが、繋がっていない。

播磨：福祉のところに芸術系の大学の人が、美術大出身の人が来るようになった。アーティストになることをやめて、福祉のアート化セミナーをおこなっているとね。実習も多く来るし。

久保田：美術系の大学の就職先は圧倒的に福祉系が多くなっている。

播磨：女子美も、専門のコースをつくるために、うちのスタッフの柴崎が行っている。そういう社会のなかで専門を生かせるように。で、ここだけじゃなくて、高齢者施設などいっぱいありますよ。この前早稲田大学で福祉文化学会があつてね、うちにも福祉系の大学を出ている人がいっぱい来ていますが、「押し並べて言えるのは、想像力の欠如だ」と。管理しか覚えていない。そんなことでいいのかと。人間の痛みとか苦しみや悲しみやさびしさをそういう制度だけで救えないと。想像力がなければ救えない。それは文化だと。そういうことを言わないと。すぐに資格という。

参加者 B：どこの現場でもいえること。

田野：偏差値教育によって、工夫の余地がない人だけが居るという。いろんな経験を無駄だと思われるようなことを体験している人が教育現場にいない。

播磨：自分は必要な存在と見てくれる人の存在。

参加者 B：障害って本人の問題ではなくて、私たち周りの問題。

久保田：明日は実は、まだ学校に行っていない子どもとアーティストとの会があるのです。子どもたちを変えるのではなくて、先生方をリラックスさせたり、変えていきたいと思っている。先生方に大勢集まっていたいで、これからそういう場所を変えていこうと考えている。でも、頼まれるから行けるんであって、うちの子どもが行っている学校も呼んでくれたことがない。そういう場所が増えるとむしろアーティストの活躍の場が増える。

播磨：でもね、アーティストも固いところがあつてね。自分はエリートだと思っている人もいる。美術大学の先生方がそういう発想の人が多くて駄目ですね。

久保田：アーティストもいろんな人がいて、職員にはなりたくない。束縛されたくないんだよね。

播磨：契約することですね。週や時間を決めたりね。自由度を高くしてね。フルに入ったら、駄目ですね。

久保田：で、ちょっと困ったことがあつてね。児童デイサービスを始めると、いろんな子が来るでしょ。その時に、トイレとか食事の世話に対しては「僕の仕事ではない」という。

播磨：ケアはしないということね。

久保田：そうなんです。職員にはなりたくない。お金も要らない。でも関わりたいという。

播磨：ある程度、分業しないとイケない。ケアの人とアートの人と。後は、連携してやらないと。互いにやりづらくなる。

田野：短期間だといいですけどね。

久保田：でも、期間限定だと難しいし。

田野：所属欲と、自由度との調整。

播磨：でも、アーティストもの中には、一緒に酒飲んだり、下の世話までやりたがる人もいますよ。初めて接した時はちょっと引く人が多いし、尻ごみもするのは普通で次第に慣れてくると自然にできる。初めからやらせるのではなくて、自然になるのを待つということ。アーティストも賞味期限があるんですね。手法も発想もマンネリになるということがある。経営者側からいうと、新しい人が入ってくる方がいいということもありますね。障害のある人もね馴れ合いから、新しい関係が出来ればいい。大枠は変えないで、新しい人に何をやらせようかということは、アーティストの才能や資質をみていくという。たんぼぼの家のアートセンターも、改革を進めているんですね。絵画や織りや陶芸という枠組みでずっとやっていきたくて、その枠を壊して、新しい分野を入れているんです。ものづくり専門の人とか、美術系大学の出身者を。

久保田：障害者支援センターを作るときに、サービス管理責任者を雇わなくちゃいけないって、ハローワークで募集したんです。福祉の専門の人で、でもアートのことは全く興味を示さない。会議をすると、アートのことはアーティストが進め、福祉のことは全くアーティストが興味を示さない。

播磨：制度を利用しようとしたら、きちっとした管理責任者は、マネジメントなんだから両者必要。

久保田：福祉の人は、真面目なんだけど、人がいないと動けない。

播磨：学校教育に問題がありますね。知的好奇心があると、自分で考えて、人間って伸びていくんですよ。

田野：イメージを描いて空想できない。言われたことはできるけど。

播磨：福祉の現場にいい人材が集まるように、教育しないと。

久保田：たんぼぼの家のやっていることは、レベルが高くてもう福祉じゃなくて哲学の学校ですよ。

播磨：哲学は難しいんじゃないって、哲学とは「よく生きることを考えること」ですよ。そこから始めている。日常哲学ですよ。実践していると。吉川英治という作家が「菊づくり菊見るときは陰の人」という句を詠んでいる。丹精込めて育てた菊を見るときは陰から微笑んでいるのが僕なんです。分かりにくい人には、食事に行ったときは、おでんを食べながら「おでんには、がんもや大根やいろんな素材の味を引き出す出汁がある。その出汁が僕なんです」と、分かるように説明しているんですよ。トップが前に出て行くのではなくて、皆で輝くことの世話をしているのが理事長なんですって言うんですよ。何回も違う形で話しているんですよ。楽しみながら苦労しているんですよ。

田野：まだまだ自分のお仕事があるということで、存在の必要があるんですね。

播磨：ジャニーズの嵐の相場くんというアイドルが来たんです。本をつくるらしいんですけど。福祉の仕事に就きたいという興味があって。彼のイメージしていた福祉

の現場と違ったと。うちのメンバーが大喜びして頬ずりして涙を流していた。メンバーもスタッフも誇りを持って居られるような施設を目指さないと。嵐も来るようなね。嵐も知らんようなスタッフもいますが。スタッフも多様で。我々の仕事はコミュニケーションですけど、対人コミュニケーションが弱い。メールはできるけど。それをどのようにするかということですが、鳥取の鳥の劇場の中島さんとコミュニケーション開発のワークショップをやろうとしている。提案しようとしているんですね。やることはいっぱいありますね。たんぼぼの家のホームページが大幅に変わるんですよ。コピーも文字要素も考えてね、アートセンターHANAの何をテーマにするかということ、絞り込んだ。アートのことは盛り込んだのですが、これからはコミュニケーションであるということ、これを大事にしていこうと。アートはコミュニケーションと。議論しています。時代の変化ですね。社会を意識しているんです。福祉も社会との対話がずれたら大変。

田野：大きな施設は岡山にもあるけど、地域との繋がり。社会との対話がないと陸の孤島になる。現在、私たちも施設の美術の時間に関わっているんです。

播磨：僕らのところも、あちこち福祉施設の人と関わっているけど、アウトリーチして契約していくことですね。福祉の職員がアートを自分のところの職員だけでやらないことですね。アートデリバリーをしている、東京の並河さんですが、アーティストの派遣をどんどんやっている。

久保田：東京だとアーティストがいっぱいいますよね。

参加者 C：施設の中では「絵が描ける」ということを重視していて、描かせたがっている。だから、そういう福祉の人が、全く理解できそうにないようなものを「作品ぽく」して、地域の人たちの家のリビングに飾ってもらうことをしたのです。その間に、その家族の人たちとの出会いのきっかけに作品があるというようなものを行った。

播磨：分かりづらい職員にアートをまずすること。感性

が高まるというか、感受性が豊かになるようなことをアートの面白さを伝えるか。ワークショップなんかにも職員を参加させることでしょうか。驚きや感動を持って人は変わるからね。「存在と生活のアート」として、書が大好きな女の人が出て、でも本当に好きなことは漬けものを食べることであったので、漬物を作ろうと。そこでキュウリから作ることをしたんです。水をやったり管理する時にその人は植物という生命体を大事に育てる。出来上がった漬物を使ってパーティーをしたんです。ここがアートなんですね。そういうことが出来る。岡山での同じようなことをやっているなど思った。絵を描いたり粘土を捏ねたりということだけが作品ではない。

田野： 広告の裏に描いている落書きのようなものを親はゴミと思っていた。でもそれが時計の形になっていたの、その紙を生かしたまま本物の時計にした。

播磨： ものの見方ですよ。これ、水を入れたらコップがある。ビールを入れたらジョッキになる。花を入れたら花瓶になる。鉛筆を入れたら鉛筆立てになる。つまりは意識を変えること。福祉はこういうものだとすることを、まずは置いておいて、自由に考えなさいと。自分がやってなかったことをやってみよう。日本にいたら分からないというのなら、外国に出てみなさいと。言葉も不自由だし、そこで言葉についても考える。

田野： 前回、アメリカのクリエイティブクレイに行ったときに、地元のアーティストと一緒に病院の病室を回っていったのです。

播磨： アメリカのアーツインヘルスケア学会がやっているアートデリバリーですね。物語と一緒に語ることですね。治療だけではなくて、そういうケアこそが、治療。アーティストが活躍しているんですね。ちゃんとした医療行為ですね。フロリダ大学は先進的ですね。そういう分野で、高齢者の施設とか子ども病院とか、本当にアーティストの場が出来ている。アートの社会化なんですよ。今までアートは美術館とギャラリーの専有物で特別なアーティストがやっていたんですが、これからは、北川フラムさんが言うように、アートは「人と人とを繋ぐ」「人

と場所を繋ぐ」のがアートの役割と言っていますね。我々が着目しているのは「人間が生きるのを助ける」役割がアートにあると発見しているんですね。繋ぐだけでなく、人が生きることを助けると思うと、もっとやる必要がありますね。

田野： 場所性を尊重しながら、作品が共存していく。

播磨： ゲオニロキ、その土地の地霊と鑑賞者とアートを繋いでいく。フラムさんに聞きたかったのは、それを感じ取っているのかということ。聞いてみるとフラムさんは「ピンピンに地霊を感じている」と。地霊と鑑賞者とアートを繋ぐと。そこに住んでいる、根付いている伝統とか文化を詠み込む。

田野： 鑑賞者の目も肥えてきているし。そこでしかできないこと。

播磨： 障害のある人は地霊とか、そういうのを感じ取る力がある。人間の野生とか古層とか、人間の本来持っているもの。それをどう引き出すかですね。決して遅れているのではなくて、我々が失っているものを持っているということですね。

田野： 近松門左衛門の虚実皮膜。知性と理性の境目。

播磨： センスとノンセンスの間。かたちにしてしまうのでも囲い込んでしまうのでもなく、揺らいでいくところに面白いものがある。まだまだこの分野はこれからですよ。まだ理論も出ていない。彼らの表現とかその発見が、我々の忘れてしまった、文化の本質的な処があり、それをどう読み解いていくか、どうアートと結び付けていくか。これをアートの人にもっとやってもらいたいですね。アートの制度化により行き詰ってしまったものが、もっと揺らいでもいいんじゃないかということですよ。

田野： 現場で大事にしないといけないのが、分からないものに時間を割いていく行為。

播磨： メディアの人もそうですね。分かりやすいものは書く。知っているアートしか知らない。でも障害のある人の表現については書かない、排除する。その表現で人間とは、どこからきてどこへ行くのか。人間の存在とは何なのかというテーマ。ゴッホやゴーギャンではなく、

我々の身近でいろいろ表現している訳ね。それをとるに足りないものとして捨てているという文化が貧困だと思う。

田野：捨てているものから生まれるということで思い出したんですけど。私たちの作っている「桃のピクルス」です。摘果されて捨てられる幼果桃と、ともすれば産業廃棄物になる酒粕からできた漬物で、かつてはその地域のお年寄りが漬けていた。その復活は、「新しい価値は残滓から生まれる」という鶴見俊介さんと姜尚中さんの対談を読んでいて思いついたのですが。

播磨：それは、非常に象徴的な話ですね。アイデアを皆探しているけど、生きるヒントを探しているけど、これは我々が近代化の中で捨ててきたものの中にあるんですね。ものだけではなくて、記憶ですね。人の記憶。島とか田舎もそうですが、街でもいい。皆、持っていた8ミリフィルム。その上映をする。すると、お年寄りは、もうみんな集まってきて思い出して、大興奮する。古いことはよく覚えていて。それが街の記憶ですね。いい語り手を出会わせる。アメリカの諺にあるけど「一人の老人の死は、一つの図書館の死だ」と。老人はものすごくいいものを持っている。でもいい聞き手が行っていない。生きたミュージアムですね。

老人の話ストーリーにして、朗読劇にするといいと思う。古い写真とか集めてもらって。町の記憶。とか、島の記憶。何も偉い人だけが時代を作ってきたのではなく、一人ひとり名もない人が社会を作ってきたんですね。意味がないと思われているのね。それを一人一人見せていくのがミュージアムになるのですね。どこの家にもあったもの8ミリとか、捨てきれないものを使う。うちではLPレコードが捨てられない。ものすごくたくさんある。それぞれが捨てきれないものをこういうところで持ち寄って、昔の思い出なんかを話したらどうかと思うんですね。ものをべたべた貼るというのではなくて、ものと文化とか事件とかをキュレーションしないといけない。ものを再現して見せる。イギリスのマンチェスターに行ったときに、かつてそこで使われていた水力発電で紡績を

行っていたトップハウスという空間をオーディナリービープルのミュージアムにしている。労働争議のときのものがあったり、実験もできる。解説が役者なんですね。役者の就職口。演劇を使っている。ミュージアムといっても、骨とう品を置いてあるだけではなくて、生きた人間の歴史を教える。その当時の歌を歌ってくれたり、話を生々しく人間の歴史を教えている。もう一つはボルトンという市のミュージアムで見たのが、普通の人々の街の記憶。展示を見ながら聞いたり、面白かった。これからですよ。

田野：瀬戸内の島は物理的に閉ざされているから、古い文化も残っていたり、住んでいる高齢者や障害のある子どもが、地域で顔の見える付き合いが出来ている。

播磨：限界集落という言葉もあるけど、人間の生存は限界が来たときに最も大事なことが思い出される。文化が繋いで新しい関係も生まれる。

田野：究極の目的は、そこに住んでいる人の活性化。

播磨：我々の可視の物差しを変えないといけない。経済の活性化、と言われていますが、今問われているのは、経済だけでいいのかということですね。経済成長することによって人間は活性化するのかということを再興しないと。経済を復興させるために抑圧されてしまったことを復活させることにこそ、大事なものがあるのではないかとことです。ほとんどがアートを持ち込んで経済を復興させようという考え方でしょ。これはもうやってきたことで。生きる環境が悪くなってきた。日本の社会がなんでこんなに駄目になってきたかと言うと、戦後の二つの社会目標を疑ってもいいんじゃないかと思うんですね。一つは経済追求、効率主義で豊かになるということ。そのために経済成長優先で、効率主義でやってきたけど、人の絆がばらばらになってしまった。もう一つはアメニティ、アメニティ社会は3Cなんですよ。clean、convenience、comfortですね。ちょうどさっき話しておられた久保田さんの子どもさんとは反対ですね。それを徹底してやってきたから、汚いものは排除しよう、不便なものはどんどん便利にしていこうとしてきた。一番大

きな問題は、不快な他者を排除してきた。他者を不快に感じるんですね。その最たるものは、不快な赤ちゃんを殺してしまう。親の子殺しとか、子の親殺し。一番集中的には障害のある人を排除してきたことです。それを大事なことと捉えなおして見せていく道というのが、アートの役割ですね。幸福とは、豊かさとは何なのかと、話し合った方がいいということですね。いろんな分野の人がね。

久保田：浜松は経済でやってきたけど、駄目になったから、アート・文化にも目を向け始めた。私は建築出身なので建物が好きなんですね。で、どうすると言ったときに、たけし文化センターを提案したけど、福祉分野は無理だった。あと、ここで話していることを分かる人はどのくらい分かるんだろうと思うんですね。このレベルまで分かってくれる人を望んでも人は離れてきそうで。私はまず資金を作ろうとしているんですね。やっぱり、浜松はものづくりの街で、小さな工場も一杯あるんですよ。部品を作っている。ITに変わったときに、工場は辞めていった人が多い。でも、その工場の中には面白いものが眠っている。

播磨：中村智彦さんが、東大阪で産業ミュージアム作っている。そういう人と組むといい。

久保田：経済も街も衰退しているけど、箱モノを使わない手はないと思う。

播磨：いろんな人がアクセスしてくる人の道を作っておかないと、人は集まってこない。

久保田：アートという言葉を使わないようにしたんです。たけし文化センターはあれでいいんですが。活動では、高尚なところと泥臭いところを使い分ける。今回は勉強になりました。

播磨：そりゃあもう、本当にやり方ですね。

《プロフィール》

播磨靖夫(はりまやすお)

財団法人たんぼぼの家を奈良で創設してから今日まで、福祉・芸術・地域の分野をゆるやかに横断しながら成熟社会を想像している。

久保田翠(くぼたみどり)

NPO 法人クリエイティブサポートレッツ理事長、環境デザイナー、静岡大学農学部非常勤講師。2009年より個人のみなごしを基軸とした「たけし文化センター」を創設。

2010年より障害者福祉サービス事業も着手する。

「瀬戸内の今昔」

白石島公民館館長

天野 正



少子高齢化が深刻とされる瀬戸内の島。しかしそこに生きている人たちは、豊かな文化と自然に囲まれ生き生きと暮らしています。私たちに本当に大切なものを考えさせてくれる時間です。

私は、公民館長という仕事としてというよりも、島で暮らしていて、島の中でどんどん失われていくものを集めて、出来るだけ残しておこうと考えています。古い写真なんかが出てくるとデジタル化したり、古い道具が出てくると修復して使えるようにしたりして。その中でも島で元禄時代からつくられている、和綿の復興をしています。

一 昭和初期の写真一

開龍寺の焼けおちる前のお太子堂の写真が出てきたのでご紹介します。どうして私がこんなものを持っているかというと、白石島で蔵を壊すときや、家の改修工事をするときには、必ず私に声がかかって「取りに来なかったら捨てるよ」と言われて、いつもあわてて取りに行く。

白石島にある開龍寺は、源平合戦の落ち武者の霊を弔

ったお寺です。また近年の戦死者を弔うための寺。白石島は瀬戸内海の中央にあり、今でいうと国道2号線みたいなところで、昔から戦乱に巻き込まれることが多かった。四国にも白石姓が多いのもそのせいかと言われています。

江戸初期には水野家の祈願寺となります。白石島は、軍馬の放牧場として、島の草を焼き放ったときに岩の祠から大事な本尊が出てきた。そこから寺を再興したんですね。当時の民衆の檀家寺は別の島の神島の方にあった。だから冠婚葬祭のときには、神島にわざわざ渡るんですね。これは明治の半ばまで続きました。ある時、海難事故もあり、この寺を島の人の檀家寺にと願いだした。日露戦争のころにも島から戦死者が出て、その弔いを自分の島でしようと。ちょうど我々の曾祖父の時代です。檀家になりたかった先祖たちの願いもあったし、一方で、ここらあたりの島は一つの村だったので、そのうちの一つの島がそれまでの寺の檀家から無くなるということもあり、話し合いは紛糾した。島の人、「檀家にしてもらえないのなら、島中で耶蘇教になる」という意見まで出た。だから今でも、島の人みんなお寺を大事にする。島をめぐる縄文の遺跡というか、岩肌のへこみがあるところからは、土器のかけらも出てくる。

江戸後期から昭和の初めまでの島の人々の楽しみは、山歩きとか、花を見るという風習があった。ここは漁師の村ではあるけど、けっこう風流を好んでいたんですね。今は、白い石はうっそうとした木に隠れてしまっていて、大きな岩もあまり見られないけれど、昔から、大きな岩の信仰があったので、今でも大きな岩の下には祠があるんです。だから、島の木を剪定したら、その白い岩がよく見えると思う。今は600人くらいの人口ですが、昭和25年ころには、2600人いた。島のそこら中は畑で、岩もよく見えていた。

— 手旗信号をしていた大岩の写真—

漁業は船団を組んで行って、島の岩の上から、船に魚の群れの動きを教える役割をする人がいた。そして大漁になったら、しらす干しのための湯を島中の家の風呂で一斉に沸かすために、畑仕事をしていたお母さんやおばあさんに大声で伝えていたものです。

— 白砂青松の対岸の福山の景色や白い石がそそり立つ

白石島各所の風景写真を見ながら、昭和 20 年くらいには島で、私の兄貴も海水浴の休憩所をしていたんです。木製のボート、今のシーカヤックで貸しボートをしていた。その頃は、京阪神や岡山から泊まりがけで、ある程度豊かな人たちが大勢来ていた。私でも中学生のころには、街から来た子ども若いお姉さんたちに「ボートを漕いで」と頼まれて漕いでいたんです。(笑) 今よりももっと浜が大きくて、季節によって風向きが変わるので、それによって浜が形成されていた。

「貧しくても豊かだった」

戦争直後で 1950 年くらいの写真を見ていると、豊かな感じがする。このころは、重油で走る船で、私も学生のころはこの船で本土に通っていた。面白いことに、学校別にグループになって、男女別々に乗っていた。当時の船では、笠岡まで 55 分くらいかかっていたので、宿題したり。棧橋では、次の船を待つ人が堤防を埋め尽くすくらい鈴なりで並んでいた。真鍋島の久一守司さんはこの船のボイラーマンだった。でっかいトランペットみたいな管を通して船長が指令を出して。こんな木製の船を復元できたらいい！瀬戸内海を横断する航路を地元の三洋汽船と協力して、木造の船を再現する。設計図は残っている。

「national park 白石島」という島のお土産だった絵葉書が出てきた。昔の人の方がセンスがあるなあ。昭和の観光ハガキの復活させたい。

開龍寺は神野島の八十八か所めぐりの奥の院で、多くの人がお参りに来た。浜でやぐらを組んだり船を繋いで 33 年ごろNHKの「のど自慢大会」をした。小学校高学年から中学生のころを思い出すなあ。浜が人で埋まるくらい来ていたし、ボートも嬉しいくらい儲かっていたから、ボートの番も結構楽しかったんです。

— 白石踊りの昭和 20 年代の写真 —

島の人が、今の海水浴場の浜で踊っているけれど、ユニフォームはなく完全にはそろっていない着物で踊っています。今のように服装がきちんと再現できたのは、1970 年の大阪万博のとき。僕が 21 歳くらいのときで、太陽の塔の下のお祭り広場に、島から 100 人くらい踊り手で行ったんです。いろいろ練習して、初めは 5 つの輪で踊って最後に 1 つの輪になるように。

島にある国際交流ビラをこの春に改装して、運営は白石の島づくりをすることになった。ホームページも整備して。多くの外国人が来るように。国際交流ビラを 6 次産業にできないかなと考えていて、外国人が二人住んでいるけど。

島で農業法人を作ろうとしているんです。300 年前に頑張った先人たちの干拓地が荒れてきているので、自生する桑の木からお茶を作っている。昨年からお茶の効能を調べる実験も京都工芸繊維大学と協働でして、日本国内では最高級な桑の木が見つかったので、挿し木をして増やそうと。

対外的な信用度を高めるために、お茶の安定供給も図る必要があって、真夏の作業が多くなるし、島の人は海水浴ともかち合うし。そこで、田野さんところの若者をちょっとお願い。夏の人出を宜しく願います。作業は、枝を切って屋内乾燥を砕石工場の跡地です。葉っぱの洗浄は、海苔の洗浄機を使う。こうやって、あるものを利用できるので、農業漁業の連携が課題です。現在は、血液検査データに協力してくれた 100 人くらいの島

の人の数値を公開して無料で試飲している。今後は岡山大学との連携で農地の利用として、土壌検査をし、白石の安全なお茶として他のお茶との差別化を図る。桑の木に番号を付けて、検査の対象にするので、それぞれ個人の私有地に生えている桑なんで、農業法人化して自分たちで責任を持って出来たらと思っている。桑の木も生かされるし、畑もきれいになるし。こうやって産業が出来ると移住してくる人もいます。

102歳が最高齢者 まだまだ夢はある。島の人は骨の材質がちがうと思うよ。毎日じゃこを一杯食べているから。お年寄りも交えて、桑の仕事をしながら 木を切ると石もみえる。木をくべるストーブに変えて、化石燃料を木炭にかえるといい。私は本も好きで、古本の行き場がないので、島の図書館を作りたい。「彼のオートバイ彼女の島」の舞台だし。残っている映画館を使い何かしたい。

島に生えている植物、桑や綿を生かす。それを家に眠る古民具を使うことで加工する。漁業の海苔の洗浄機や、かつて御影石の産地として栄えたころの碎石工場の跡を茶葉の乾燥に使うという。ないものや閉塞している状況を決して嘆かず、あるものの利用を楽しんで行く島の人たち。そこには高齢者も、障害のある人も、島の人も外の人も入り混じって関われる。天野さんは、アートは専門の人のものだと思っていたという。昨年この島で私たちが展示をするまでは。しかし、今は「島の人の日常の中にアートの視線が加わると、島の暮らしが生き生きとしたものになる。アートで変わることを実感した」という。

島にしかない本を読みながら瀬戸内海をクルージングしたいと切に思った。(田野)

「岡山県の食文化と今」

【対談】

岡山県文化振興課参与

若林宏之

NPO 法人ハート・アート・おかやま代表理事

田野智子



2009 年末に岡山県倉敷市で行われた県民文化祭。そのテーマ「食」「綿」から、地域の特産と文化について話していきました。

田野：まずは街の中心市街地活性化と文化の繋がりについてから、話していこうと思うのですが、高松市の商店街が最近活性化している。地域の商店街がどこも疲弊しているという状況の中、文化が経済を活性化させている。先月、それを私の知人の八戸の人も見学に来ていたので

若林：でもね、どこの地域も、いいものを持っていると思う。確か八戸の街は中心部が二つの駅に分かれていて、そこで大規模な朝市をやっている。ホテルに泊まって、庶民的な朝市を何箇所か掛け持ちで回りたかったのですが、離れていて、全部は一度には回れない。

田野：そうですね。私もある住宅地でやっている朝市に

行きました。早朝から始まって、住んでいる人が通勤通学でその道を利用する時間には、もう何も残さず去っている、幻のような光景だった。

若林：逆にそういう良さは、高松にはない。自分ところの良さを生かさないと街はつukれない。

うまく人と金を集積できる人がいると一気にうまくいくんだが、そのぐっと伸びたときに、それを抱え込めるだけの組織力があるかどうか。行政の経験からすると、そういう時にその組織が行政と組むとさらにうまくいく。どこの街にも中心で動く人がいるものです。日本は広いから、あちこちにいます。

津山の B 級グルメとか、八戸のせんべい汁とか・・・、ハート・アート・おかやまでつくっているモモピクとか、なんやってくれると期待していますよ。街ごとに、なんかないといけない世の中になっているが、情報の広がり方も昔とは違うし。

田野：私は、モモピクもピークを作らずにうまく持続したいと考えていて。

若林：よく言うところのサステイナブル。でも、地域の中では、トラディショナルなものを再考していくことが大事なんじゃないかな。

田野：どこも少子高齢化が進んでいますが、絡めていきたいのは、その地域性と活気ですよ。

若林：そういう意味では、ここは面白いことをしている。昨年の笠岡諸島にはお年寄りが多くいて、その島のコミュニティの中で生きているし、若い人や子どもは島から出ていくことに目が行く。僕が行った白石島では、そういう中で、島のひとと、自分の息子くらいの年齢のアーティストと交わっている。話をしているのがとても楽しそうだった。だから、定住しないでも、以外にうまくいくんだと思った。

田野：価値観を同化させないで、島の外から目線と中からの目線が交差して、自分らしさを保ったまま付き合う。

若林：無理なく入っていき、無理なく出ていき、島の良さも後から気付くというように、互いが美味しいところを取り合う。感心して見ていたんです。多分、ある一定

期間というやり方が、大事で。これでやれば、岡山県はそこらじゅう中山間地域だから、若者が入っていけるところだらけ。いいんじゃないかな？今年もやらないんですか？

田野：春から準備して、夏には島に滞在して、メンバーの障害のある人も、お盆の期間中は白石踊りの練習や夏の行事につきあう。そこで、住んでいる人のインタビューをして回りたいですね。縁側で昔話を聞いていく。これって些細なことですが 人間っていつだって化けるから、高齢者にとっては、自分のキャリアや手仕事を人に伝えることで元気が出る、自分を取り戻す。そういう時間を共有したいです。

若林：瀬戸内のコミュニティとか 人と人との関係性とかと、ハート・アートは面白いと思う。

島に持ってくるという発想は面白かったと思う。

田野：井上太郎著の大原總一郎という本を読んでいるのですが、倉敷の紡績企業が出来た背景や、庄屋さんがあった時代の倉敷、街や駅が出来たころの時代背景などを読んでみると、現在倉敷で行われている町家トラストの活動とか、通り全部をひな飾りや屏風で見せていくこととか、これまで住民に根付いたものが住民サイドで受け継がれていて。決して派手ではないが、時間をかけて大事な文化を伝えることを楽しみながらしている。そういう意味で倉敷での県民文化祭は面白かったです。

若林：通りで餅つきをしたりとか、古い家の中でお汁粉を食べたり、綿打ちをしたりという、日常に溶け込んでしまうようなのが良かった。行政側は、人が多いとか、参加人数がどうかとか数字で成果を求められるんですが。ああいう日常があると、住んでいる人はいいなと感じる。「山のような観光客が来るのではなく、ときどき知らない人と話すというのがいい」という住んでいる人の気持ちですね。

で、高松市では、現代アート展をしているけど、その作品を交流して、岡山でもこういう商店街でやりたいと思っていた時期もあった。

田野：私は、この商店街が出来たときや店が開店した時

の、商店主や家族とかの写真や映像を取り出して、商店主自身が主人公となってそれぞれが記憶を辿るという展示をしたいと持ちかけたことがある。でも「それって儲かるの」と聞かれましたね。

若林：昨年度の県民文化祭を津山でしたとき、古い写真を出した江見写真館だけは、本当にそこだけ人がいっぱいいた。

田野：島でも記憶を辿りたいと考えていて、古い写真とか高齢者の記憶を呼び覚まして後世に伝えることを新婚旅行とかなかにかテーマを設けて収集したい。

若林：ここの商店街でも何かやってほしいんだけどね。ところで 総社では何をするつもりなの

田野：我が岡山県備前藩には、閑谷学校がありますが、大分県日田市には 広瀬淡窓がひらいた咸宜園があった。そこへ全国から学問を学びに行った若者の中に、総社の池上秦川がいたのです。彼は、学問を習得後、総社・当時の浅尾藩の薪田大名の蔵元となり、明治になって大日本租税誌の編纂をした。その家は、空家になって久しかったのですが、地域のなかで障害者や子ども、高齢者らと交流してほしいという持ち主の意見と私たちのやりたいことが合意した。

若林：だからそこでなにをするの？

田野：一般的にプロジェクトというと、年度ごとに期間限定で答えを出すとか、事業をして報告書を提出して終わりというケースが多いのですが。そうはいつでも、何がしか人が集まって、物事を決めて実行するには時間がかかる。じっくりと関わりを繋げていきたいと、それぞれの個々人の思いを繋いで文化として発酵させていきたいと思うんですね。ですから「今年はまずは、塀を作るか」とか、「タタラをしている地域の高齢者の見学してみよう」とか、「鉄の作家と砂鉄を取りに行ってみよう」、「いや、まずは炭を雑木でつくることとしよう」と言うように、話し合いの中から生まれたことを実行まで組み立てながら、そこに関わりを作ることを目指しています。そういう場を開いていくこと。目的が先に来るのではな

く、ゆるゆると進んでいくことをする。ピクルスの詰め替え作業もここでしているんです。

若林：なんか面白いことをやってるなあ。

田野：いろんなコミュニケーションがあると思うんですね。例えば、ちょっと重い障害のある人は、その子がいることで逆に周りにいろんな人が集まる。だから、人を集めるのがその子の仕事。そんな感覚です。ひとつ関が開いただけで、思ってもみなかったような人が来られるような。そんなきっかけを作って行きたいと。

若林：その遊びには、お金が要りそうだな。資金的にはどうなんですか？

田野：資金源は、これはもう大変ですよ。企業メセナといってもこの社会情勢ですし。地域の中小企業の CSR、これは難しい。

若林：中山間地域をどのように活性化させるかということは、行政の大きな課題。何十年もかかってこの状況になっているのに、一年間では何ともならんということは、はなから分かっている。でも、役所はどうしても1年スパンだから、継続性がない。

田野：例えばね、道州制が引かれたと考えると、岡山という地域性では特化したものとは、仁科博士、物理学者ですね。こういう先人たちの知識と知恵を地域の独自性と繋いでいくといいのかなと考えた。総社への思い入れは、結局江戸時代後期に経済的に傾いた藩を地域の特産であった備中鰯を江戸に送ったことで助けたという、池上秦川や山田方谷のやり方。ブランディングですよ。そして、一方で、秦川の通った咸宜園のフラットな学びの方法です。広瀬淡窓は定期的に行うテストによって、身分とか地域とか関係なく塾頭になるチャンスを与えていた。そういうシステムの開発が面白い。どんどん関わる人が企画を持ち込んできて、しっかり話し合う。それを総社でやってみたい。

若林：そういえば、一時期街おこしのリーダー養成を県が行っていたが、その塾生たちは今どこで何をしているんでしょう。そういう人を繋いでみると、もうちょっと行政にとっても有効だし、具体的に何か出てきそう。た

だ、その時の補助金、支援金の用意と、その後の NPO が自立できる方法を伝授しないと。どうしたらいいんでしょうかねえ。モモピクは今後どうなっていくんでしょう

田野：どうなるんでしょう

若林：岡山の農家なら大抵、庭先に桃を植えている。高梁市のある企業では、選果漏れの桃をシロップ漬けにして他県へ出荷しているんです。引き取った先で最終加工されて、市場に出る。しかも百貨店の食品売場に並べます。モモピクも可能性があるでしょ。

田野：清水白桃1つを育てるのに剪定時に40個くらい落とす。だから、その時点での屑桃はすごい数になる。でもこれ、東京の台間山のピクルスショップでは、イタリア産のが100グラム700円で売られてますよ。

若林：今のこの体制で、30トン40トンくらい増えたら？ピクルスの方が難しいかなあ。選果漏れのほうが簡単かもしれない。他にはトマトもすごい量を捨ててます。選果場でトマトは、形よりも色のゲージの選別機ではねられる。出荷する移送距離と、廃棄する移送距離を考えると、そりゃあもう冷蔵庫を買うよりもコストの安い方に行く。

田野：マグロもそうだけど、食べきれないほど作る必要があるの？

若林：スーパーでは、季節を問わず一定量が求められる。

田野：スーパーで売らない。皆、露店で売る。

若林：はねた量に見合うだけのトマトを地域の人が作れるかどうかですね。

田野：でもトマトの水煮缶は輸入していますよ。重油使っても海外からの方が安い？

若林：世の中のシステムがそうなる。たとえば備中地域では、古くから白小豆を作っていたが、どんどん作り手がいなくなって、いまでは幻の白小豆になっている。個人で作ることはできても、選別する機械がないから流通規格に合わない。結局、商品として流通させることができない。だから伝統的な作物はどんどん衰退する。何軒かの農家が集中してその時期にどれくらい収穫できる

かが分かっていないものは、日本では出荷できるルートがない。味に変わりはなくとも規格に合わなければ、無駄のように捨てる。このひずみを突破しないと。それがモモピクかな。

これが、幻の白小豆です。備中が産地で、主に京都の和菓子屋に売られていく。ある一定の量がそろわないと豆の選別が出来ないんで、流通業者が作っている農家を回って集荷しています。だから地元の市場には出てこない。黍にしたって同じで、これは皮をむく前の黍。これも殻を精白しないと食べられない。そのあとで機械にかけて虫食いをとる。人間の目ではできない。県民文化祭の倉敷ジャムのときには手でしたけど。

田野：黍ってつくるのは簡単ですか？

若林：精白する機械があればね。でも、岡山県にはない。手仕事は大変だし、大量になるともう無理。まして農薬をすれば簡単かも知れんが、虫食いをはねる色彩選別機もないし。

田野：そういう作業が得意な子どもがいっぱいいますよ。

若林：お玉1杯の量で一時間かかるよ。作物自体は3ヶ月でできるのに。総社では雑穀を作っているけれど、農協を通して他県で精白している。

田野：なんで岡山にはその工場はないの？

若林：栽培されている量が少ないうえに、商品にはならんからかな。

田野：黍の国なのに

若林：黍はそれだけだと苦しい。

田野：昔はよく食べられていたのですか？

若林：雑穀と一緒に、破米や古米を混ぜて。

参加者 A：とりあえず給食で食べるというのは？

参加者 B：水車で精白機を作って動かしましょう。

若林：その機械を作ってくれたら、相当の量が出る。

田野：これをやってみようか？

若林：こんなの山のように作ってどうするんよ。いろいろ試してはみたのですよ。ロール式の精白機にかけて、米用の使った。循環式の精米機に入れてみると結構いけたけど、あの機械は続けて使うと熱が出るので冷まし

てから。そのあと、虫食いをはねなきゃいかん。これが大変なんです。山のように出来たら、本当にどうする。うまくいけば「健康食」で行けるとは思う。

参加者 A：そういうのを今回の「GO! GO! GO!」の繋がりを生かして施設の人たちと協力したら。

田野：黍ならいいかな。

若林：岡山県ということで、いきますか。

参加者 A：黍クッキー。きびぼうろ。

若林：どンドン、新しいのを開発してください。

田野：高梁川水系、恐るべしですね。

参加者 A：黍団子。モモピク。鉄の伝説。

田野：こういうのを一つずつ作っていく過程が面白いんですよ。パンに入れてもいいでしょ。

若林：ライムギみたいにですか。でも苦みが出る。

田野：これってアレルギーあるのかな。

パフェを思いついた！シロップ漬けの屑桃に、白小豆の白あんと黍餅。贅沢ですね。

若林：岡山のホテルオオクラのシェフが作る桃のシロップ漬けがうまいんです。プロの料理人だからシロップがすごくおいしい。

ということで、食に関していいですと 地域にもともとあったものをなんらかの方法で復活させると面白いことになるんだろうとは思っていますが、残念なことに黍の国と言いながらこれを作るのは簡単ですが、精白して食べられる状態にしてくれるところがないと言うように、結局、自分で全部しなきゃならん。

参加者 A：工場を岡山につくりましょう。

田野：総社に。

若林：昔の道具はおそらく簡単で、時間をかけてやっていたと思うんです。

田野：地域の新しい仕事になる。本当に面白い話をありがとうございました。

若林：これからもハート・アート・おかやまの活動を楽しみにしています。

「地域をデザインする」

NPO 法人まる代表理事

樋口龍二



障害のある人のあるがままを受け入れ、それを地域でそのまま「お仕事」にするユニークな発想を聞いていきました。

1997年に無認可の福祉施設工房まるを立ち上げたのは、代表の吉田さんが美術大学を卒業するときに卒業制作として障害のある人の写真を撮ったことがきっかけで、卒業と同時に施設を作った。そこに、自分も翌年に入ったんです。

一般的に施設は内内の組織になってしまいがちですが、学生やその他のいろんな人に気軽に来てもらえる、そんな場所にしたいと思っていて、当時は古いアパートの一室に場所を構えて、福祉施設を魅力的な場所にしようと始めていた。

初めは、アートというよりもクラフト的な、木工マグネットの製作を中心にしていました。次第に補助金も、スタッフもメンバーも増えてきました。ここでは、障害がある人が作りましたということではなく、「工房まる」として、障害がある人が作っているということを出るだけ言わないでいた。そのうち、結婚式の引き出物とか、受注がいっぱい来だしたんです。嬉しいことと思ってい

たのですが、ある日メンバーがついに、「飽きた！」と言ったんです。自分にも理解できることだったので「じゃあ、分かった」ということで、週に1日アートの日を作ったんですね。でもその次の日には誰も作業をしない。分かるんですよ。楽しくないもの。だから、クラフトはスタッフがしていましたね。(笑) そうなると、アートとか絵で、収入になるかどうかということになる。メンバーの給料も減るだろうし、保護者の方にも「5年待ってくれ」と連絡して、それをある意味自分のプレッシャーにしながらか、Tシャツやポストカード、カレンダーを作ったり、いろいろ始めました。

そのうち念願の施設の移転。平地で車いすの人も地域の人と関われる場所に移転しました。2003年ぐらいからは、アートの仕事がほぼ主体になりました。アートで自己実現するというミッションも工房まるの中に出てくるんですけども、その中でも社会に対してアプローチしていこうと。彼らが作品を公にしていって、面白い絵を描くとかという認められ方もあるけれど、工房まるとしては障害のある人が豊かに暮らせるような社会をめざすことがミッションであり、それをきっちり持ち始めました。工房まるは「地域の公民館」を目指して、地域の餅つきとかそうめん流しとか、子ども会に場所貸したりとかしています。

2005年ごろに、人数が増え、そろそろ無認可も難しいということで、準備をはじめまして、そのころから田野さんたちや他の団体と合同展なども始めました。施設運営事業、コミュニケーション創造事業、エイブル・アート・カンパニーとか、作品が独り歩きするとかという事業をしています。

そもそも施設でどうしてアートをしているのか。アートが必要だから。でもアートという意識は始めからなかった。障害のある人と関わっていくと、必ず社会は変わってくるということが言いたい。結局それがアート活動。97年ごろに施設を始めたときは、施設の仕事の与え方に不満があったんです。彼らにも出来るだろうではなくて、彼らだからこそできること。表現活動、アートライブを

行っていると、社会に足跡を残していると実感した。また、共通認識を持って行きました。

展覧会をやっていると、スタッフも彼らメンバーの大きな自信になるんですね。反応が薄ければ悩んで、工夫したり、現場には彼らに居てもらって来場者とコミュニケーションをしたりしています。

でも、全員が絵を描いたり陶芸をしている訳ではない。体のケアの必要度が高い人はできないし、ずっとお喋りしている人もいます。ですが、全員の作品を一同に出すという作品展示をしたんです。または、仕事・生活・ケアが3本柱です。コミュニケーション創造事業を福祉施設設立と同時に初めて、いろいろな人、企業と関わっていて、少しずつ変わって行っている。ボランティアという発想ではなくて、関わることによって自分もちょっと変わるということで喜びを味わってもらおう。いいコミュニケーションを外に広げていきたいということです。障害・福祉・仕事・自立・アート・コミュニティなんて、我々が普通に仕事をしているとあまり感じない言葉かもしれないんですが、つまり既存概念ですよ。まるでは、人と繋がることも自立。成果だけでなく過程も仕事。心の循環を促すことがアート。創造した思いを社会に還元することがコミュニティ。

一 具体的な活動紹介

「カフェまる」、地域の美容室や店舗に作品や商品を置き、作品が地域に出ていくという「てくてくプロジェクト」、地域の店舗とのコラボレーション展示、都会の真ん中・福岡IMSでの展示について、コミュニケーション創造事業は、街・社会に対しての事業です。

2007年から福岡市のギャラリー「アトリエ」の運営をしています。ここでは障害者の美術作品を出すだけでなく、障害者が作ったということを知ると「頑張ったね」と、普通の作品を見るように心を開いて見ようとかしない人がいるという、この社会を変えようとしたんです。福岡市美、アジア美術館、県の美術館の学芸員3人来てもらい、展示のワークショップをしたり、展示を見に

行ったり。全く福祉・施設など関係ない人がすごく大勢来ました。精神に障害がある人の本人のトークをすると、「精神障害者」という枠を超えて、来場者が自分との共通点を探してしまう。自分を作品とともに出すということで、我々が隠すようなことまでも出すということで、なんだか逆転してしまうんです。

地下鉄の通路で、展示をしたんですが「何これ」「おう、これ障害のある人らしい」と驚きを持って、人の足を止めたいと考えた。

他の施設も参加してくるようになり、徐々に内容も増えています。壁画を描くパフォーマンス、障害のある人が一般市民を喜ばすイベントとして、絵馬を描くというインスタレーション。あるいは、巨大な会場に「日常で自分の好きなもの」を空間につる展示。参加施設には主体的に関わってもらおうです。

展示も自分たちでやってもらおう。だから、施設業務が終わって、夜中じゅう展示して明け方の4時くらいに終わって、また朝から利用者の送迎に行くという、ハードなスケジュールなんですが、スタッフは生き生きしているんです。関わることで、いろいろな反応が出てくる。アンケートの「どの作家がいいか」とか、「それでどんなグッズを作りたいですか」とかの回答が、それぞれの施設の財産にできる。

トキメキフェスタという1日限りの福岡のイベントを委託されたんです。これまでは、あまり市民に浸透していなかったんですね。ここでは、サンセットライブしたり、告知ショップをしたり。トキメキということで「トキ子」と「メキ男」を描いてシールにして、バスに飾り、アートバスとして乗っている人を楽しませたんです。

総合学習の依頼もあるので、学校へも行っている。九州大学芸術工学部デザイン学科がインクルーシブデザインを研究しているんです。エイブル・アート・カンパニーを設立して、エイブル・アートというのは、障害のある人のアート活動を基に、市民へ芸術感や生き方を揺さぶるというムーブメントです。

2005年に施行された自立支援法が施行されたけど、働

くと言っても整備されていない社会の中で、彼らも働けるように。しかも、物を作っていく価値観も変えていけるようにと設立しました。現在 49 名の作家がいますし、また 8 名増えます。ここでは、アートを仕事にしていくということでビジネスを作っていこうとしています。施設の人は営業が専門でもないし、ある意味手が回らない。障害者アートは面白いが契約できるのか、ということもあり、中間支援組織を整えたんです。

その中で、ハーバー研究所という化粧品の本社の会報の表紙に作品を使っていた。そのうち、記念号で障害のある人の作品ということを発表したら、お客さんが驚いて、会社に対して「いい活動だ」と評価したんです。会社の方が驚いていたといいます。こういう感動があるから、またオファーが来るといふ循環があるんですね。

キクチタケオからは、「ジャマイカをイメージして描いてもらって」と依頼があつて、自分の担当だったのですが。アパレル業界はスピードが速いでしょ。でも、この絵を描く人は、1点描くのに1カ月かかると連絡したら、待ってくれたんです。彼の作品がいいと。年度末まで待つから描けるだけお願いされて4点採用されました。4月初旬発売で8月にはアウトレットモールに出ていた。そのスピードは速かったですね。兄弟がそのTシャツを着て、自分の兄弟を自慢している。表現の力ですね。そのことが嬉しいですね。

伊勢丹でも、メンズフロア全体に話をもちかけそれぞれ商品とエイブル・アート・カンパニーの作品を使ってオリジナル商品を期間限定で販売することを継続して行うことになったんですね。アートコネクト・バイ・伊勢丹メンズという商標登録になりました。すきから繋がるというキャッチコピー。あるお客さんが行っていたけれど「今の商品は、もうみたことがある」というものばかりで、障害のある人の作品は、本当に「わあっ」と驚くと。

今日のタイトルの「街をどう風デザインするか」というと、街づくりプロジェクトをしたいんです。

バスカードとか銀行のカードとかいろいろあるけれど、まとめて「いい街福岡」を作るためのカードを作って、そのカードのデザインをする。「+福岡」というカード。障害のある人のサポートをしていますというカッコよさがあるもの。工房まるの作品だけでなく、他の施設の作品も入れて。有機農法とか、アイドリングストップとか、いろいろなコピーをまとめて「+福岡」として、地域の企業は、地域の人に育ててもらっているんだから、まずは地域に還元していこうよと。

他には、施設の授産品を工房まるの作品を使ってパッケージングしたんです。これをIMSで売ったんですが、テスト的に行ったところすぐ売れた。で、これはビジネスとして行けると感じた。商品の内容は手作りで品質も良くても、ビジネスとなると、パッケージも大事だし。市場の値段と比較して、手作りの良さを売り出す。大量生産とは違うことをパッケージで生かして。それを仕事としていきたいと考えているのです。

まるのフィロソフィー、発想は普通なんです。でも「普通にしたいんだよ」では通じないことを意識的に関わってもらえるかを魅力的に伝えていきたいと考えています。まるには、全介助が必要な障害の人がいます。彼は、コミュニケーションも食事もトイレも介助。彼の特技は、机の上から物を落とすこと。人の大事なものを落として、愛での反応を見て、ニヤッと笑うんです。

彼は他の施設に行っていて、以前、その作品展示があったときに行ってみると、「希望」と達筆で書いている彼の作品が展示されていた。明らかに誰かに手を持ってもらって書いたもの。ショックだったんです。だから、彼は「ここにいることが仕事」にしようというアイデアを出した。落とすことが得意なので、ボランティアに来た人が粘土を丸めて机の上に置いて、彼がそれを落とす。人が拾って穴をあけてボタンにする。こうして人と関わることが彼の仕事と。それでできたボタンを商品にしています。

また、メンバーには目の見えない人がいて、彼は電話が鳴ったらすぐに出るんです。「今日のゲストは誰です

か」と。彼はまじめに話したいんですね。喋りは一級品なので、彼のラジオ番組をしようと発案した。そこで、カフェまるに福岡の本物の DJ を呼んだんです。もう彼にとってはミラクルですよ。最初は緊張していましたが、調子が出て、アドリブで天気予報と占いを始める。自分で競馬中継とか言うんですね。インターネットでも聞けるポートキャストイングをしたら、結構ファンが増えて、アクセス数も増えて返事が来るんですね。そこで「スポンサー募集しています」って言ったら本当にスポンサーがついて、彼にも報酬が出るようになったんです。

彼は、それによって普通の会話でも伝えるのがうまくなってきた。今後は地域の祭りの司会もできないかと思っています。

また別に、詩を書いている人がいるんですが、まるでは3年間何もしていなかったんですよ。自分から表現活動ができるか不安だったんです。当時は、絵や陶芸や木工というプログラムしかなくて「駄目だ！自分には表現能力がない」と落ち込んでいて、周りは「今日何する？」というけどそれが不安になるので、何も言わないことにしました。「何もなくていい」と2年半待ちました。その間は、彼は何かを見つけるだろうと思って。本当に2年半経ったとき急に、「詩なら書けるかも」とフット言ったんです。そういえば、まるでは詩のプログラムはしていなかった。「僕は水だ。」と、水になった気持ちで書いているんです。そのあとは、周りが盛り上がって「雲になってみる」とか言いました。自発のものが出てきたことが嬉しくて。

最近、彼は展示のときには「商品」になった気持ちで、作品の横に文字を書いています。急にスピリチュアルなことを書き始めるし。福岡の詩を書く人たちと本を出そうということになっています。

彼らと接していると、本当に待つということを感じるんですね。職員は、つつい何か先走ってしまうけど、彼らが自分から始めると、なんでも吸収できていく。待つということと、ほったらかしにすることは違うんですけど。その辺は親に理解されにくいですね。

家庭訪問をして親たちとも親密に関わっています。一生面倒をみるという約束をするのではなく、僕らは気づくということが必要と思っている。

すぐには結果が出ることをやろうとはしていないから、5年待つと言っています。

親の中には、アートやってなんになるのよと。でも、自分の知らない人の名前を言うことに偉く驚いたと。自分の子どもに友だちができると思っていなかった。で、親も変わった。

家に帰って報告ができない人には、ケアスタッフがしっかり電話している。それもスタッフの役割ですよ。

2年半待つてくれるということは、この社会にはない。

「自分がまるに行きたいです。」といって感激した参加者が泣きそうになりながら帰っていきました。

「瓢箪から駒 ～実は商品開発会議～」



●1回目 3月7日(日)

「美味しいだけじゃ売れない!? 美味しいだけでいいんじゃない?」

上野さんが所属するハートフル京都からは、「あやぼうろ」や猫の手カップの陶器など面白い商品が来ています。商品開発に関しても多くのご意見をいただきました。今回は新しく、切り干し大根や、「畑のすめ」(実は、切り干し沢庵)、桜餅の味のクッキーを持っての参加です。その他の参加者は、岡山県在住のアーティスト・清水直人さん丹正和臣さん、湯月洋志さんと、さをり織りの製品をつくっている地域活動支援センター所属の太田さんです。

施設で作られているクッキーや食品の中には、本職勝負けというレベルの高い商品もあります。それもそのはずで、職人によるアウトリーチや、施設職員が研修に向くこともあったり、また材料の地産地消にも工夫が見られます。が、パッケージにかかるデザイン料の差が、そのまま見た目の価値として定価となり、「福祉の商品」という見方で、どうしても一般の商品にはかなわないというものもあります。でも本当に美味しい。

「広告費用よりロコミ?」

知っている人しか買わない、知っている人しか買えないと、販路の行き詰まりになります。しかし、パッケージってどこでデザインしてもらえるの?と、デザイナー

やアート系の学生らとの交流は少ないようです。

「販路は増えれば幸せか?」

施設での受注については、どうなのでしょう。

工賃のことを考えれば、受注が増えれば嬉しいはず。しかし、障害のある人の生活や時間の過ごし方が、果たしてそれだけで豊かになると言えるのでしょうか?

表現の時間も確保したいし、地域の人との交流も行っていきたい。となると、製品の数量は「限定」になる。消費者からみると、限定商品も魅力的でしょう。

「素材を売る店を開いてみるというのでは?」障害の人が織っている布を利用した小物製作。近所のバザーで販売するケースが多いようです。その加工のできるハギレが何とかならないか?

様々なビーズやハギレの量り売りをしてみると、クリエイターには大きな反響があるのではないかという意見が出ました。

●2回目 3月14日(日)

「ハギレから価値を生むためには 女子高生の意見が必要!」

岡山県倉敷市にあるジーンズメーカーでデザインや企画販売を行っている西田さん、記者の三島さん、地域活動支援センター支援員の小銭さんが参加。手に手にハギレを持って自分の服やズボンに当てて見ながらの会議です。

この日は、徹底的に「ハギレ」に着目!ハギレを加工することを考えるより、加工した残りのゴミから考えることが面白い。近年のリメイクブームに乗ってみよう!そのままの形の「切れ端コースター」はどう?実際にカフェで使ってみよう!

実はそのカフェはおしゃれ系で無いと駄目。どこかのカフェで、熱いカップを持つときに使われていたコースターに似ているなあ。ジーンズのリメイク素材にしてみよう。自分だけのジーンズ加工ができる工房に置いておく。使いたい人が自由に使えるようにしておく。

さおり織りのイメージを変えてしまいたい。障害者が織って、地域の高齢者のボランティアで加工というこれまでのイメージを払拭させよう。

「かわいくてかっこいいもの」「一点もの」として、「無茶欲しいもの」へ変えていく。そのためには、そうだ！女子高校生たちに意見を聞いてみよう。そこからデザインしてみよう！

「日本のデザインは女子高生の志向から始まる」

●3回目 3月27日(土)

「障害者が作ったものの出し方・見せ方って、どうしている？」

陶芸作家の十河さん（岡山県在住）が、クラフトアート、陶芸でできたものを持ってこられました。重厚な燻銀の感じがする、お椀のような作品は、福祉施設で十河さんが障害のある人と一緒につくったもの。施設のスタッフは、それらを展示したいという。

形や感触を楽しみながら、作品を手にとつての会議でした。施設での造形活動は、数人ずつの参加。一人ひとり、興味関心が違うように、作り方も様々です。聞いていると、作品が出来ていく過程が非常におもしろい。が、作品そのものを見せたいとなると、どうしても気になることが出てきます。つくった本人の意識。見せ方。本人（作家）と鑑賞者、空間を繋いでいく人、キュレーションの役割です。

途中参加は、アスペルガー障害という大工さん。そして、映画を作っている作家も。それぞれが、日常的に行っていることや、ちょっと気になることを話していきました。

こういった異業種・異分野の人が自由に参加でき、そこに新しい価値を見出そうとしている場合は、実はあまりないのだろうと思います。

●4回目 3月28日(日)

「テキスタイルと日本文化の研修をはじめます」

ハギレを持って地域活動支援センター支援員の小銭さん。県北でアトリエで子どもたちと創造活動をしている竹田さん。施設で支援員をしている影山さんは、竹田さんと展覧会の準備を進めている様子。

テキスタイル作家の森原さん、大学院生でテキスタイル専攻の菊池さん、笠岡で子どもや高齢者らと作品を作っている荒木さん。そして田野と、今回は女子高生は来なかったけれど、女子大生、女性アーティスト、支援員、地域で活動している人たちと、全部女性でした。

前回のハギレを手を持ちながらの会議。しかし、今回は自分の服に当てて見たり、くるくるとリボンを作ったりしながら話が弾みます。

こうなったら、いっそ、遊び方や楽しみ方を買う人にも楽しんでもらえるように「キット」で販売してしまおうか？ハギレやキットの見本市を大々的にすると、これはもうビジネスになる。

そこに登場したのは、影山さんがとりだした名刺入れ。これは、県北で伝統的に織られている、作州緋（さくしゅうかすり）を使った小物です。日名川さん（屋号：ひな屋）が作っておられるのですが、これを引き継ぐ人がいない。

伝統工芸や、一つ一つの手間暇をかけたモノづくりこそが、日本を支えていくのではと考えます。全国で作られている「緋の文様」や、その文様の伝わり方を調べていこうという意見が出ました。そして、その活かし方を障害者や高齢者をも交えて、実際に何か作りながらワークショップ形式で会議を継続していこうという、建設的意見でまとまりました。

装飾品や飾りボタンなどの小物づくり、あるいは造形的にオブジェをつくったり、コラージュしたり。ここから新しい商品の開発の芽が出てくると確信しました。

おわりに

GO!GO!GO!最終日、近隣の商店主やお客さんから残念がられました。期間限定の店を開くまでのプロセスからは、これまでなかった社会の繋がりを構造として作っていく必要を感じました。ここにまとめた連続講座のトークや、アンケート、インタビューから、今後も岡山ならではの繋がりをつくり、それぞれの可能性が生かされる場を繋いでいきたいと考えております。

この事業に関しご指導いただきました関係者の皆さまに御礼申し上げます。

商品開発 伊丹宏太郎 真部剛一 清水直人
三宅航太郎 丹正和臣 湯月洋志
山本文香 友實祐介 守都純平
オノエイジ 西崎亮 藤原恵末
中屋敷智生 竹本ひかり 妹尾裕矢
延谷大和 横谷優子

GO!GO!GO!デザイン 篠原真祐 丹正和臣 長谷川海
執筆 田野智子 湯月洋志 西村隆彦
樋口龍二
編集 田野智子 湯月洋志
デザイン 丹正和臣
カット 伊丹宏太郎 西崎亮
事業協力 倉敷木材株式会社
株式会社バイストーン
編集協力 加藤種男 播磨靖夫 江原久美子

(敬称略)

GO!GO!GO!

発行 2010年3月
発行者 NPO 法人ハート・アート・おかやま
発行所 700-0822
岡山市北区表町2-7-23 2F
Tel/Fax 050-3103-4289
E-mail: info@artlinkcenter.net

© 2010 Heart Art Okayama NPO

厚生労働省地域生活支援事業・障害者保健福祉推進事業
(平成21年度障害者自立支援調査研究プロジェクト)